
思春期スイッチ。

乾 弘毅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思春期スイッチ。

【Nコード】

N8198Y

【作者名】

乾 弘毅

【あらすじ】

やたらお金のかかるバレエを辞め、これからは充実した学生生活と安定した進路を目指そうと猛勉強の末に主席で高校に入学した梶川愛。

あのときバレエを続けていたら…、なんて自分にも誰にも言われたくないから、勉強も友達も恋愛も、ぜったいぜったいガンバるのだ、と健気なカンジで生徒会長の伊藤和也の思春期スイッチを連打するお話です。

1. 順風満帆なようで前途多難かもしれない

入学式で新入生代表の挨拶をするという晴れ舞台から梶川愛の高校生活は始まった。

ぜひこの調子で順風満帆な3年間を送りたいと思います。

にやり。

高校生活を充実させるために部活やったほうが良いかなあ、と松村さんと話していたら、たまたま通りかかった中井さんに「新入生代表は創己会に入るんでしょ」と言われた。

ソウキカイ？機会部とかなんか？とは違うよね。

「生徒会執行部。3年間ずっとではないかもしれないけど、1年生の間は創己会所属のはずだよ」

知らなかった。

中井さんは3年生に創己会所属のお兄さんがいるので詳しいらしい。「でも先生にはなんにも言われてないよ」と言ったら、お兄さんに確認してくれることになった。

中井さんによく似た雰囲気眼鏡男子に案内されて創己会室に行くのと、そこには3人の先輩がいた。

この4人以外は行事や会議があるときしか顔出さない人がほとんどらしい。

3人の中のひとは入学式で在校生代表挨拶をした生徒会長の伊藤和也先輩だったのですぐ分かった。

マッチョ系イケメンという名の壁、と記憶したので忘れることはないでしょう。

あとの女子ふたりはまだ覚えられない。

名前は覚えた。

どっちかが副会長の三井香奈先輩でもうひとりが書記の藤井紗英先輩。

中井さんのお兄さんは会計だそうだ。

ところで伊藤先輩の機嫌の悪さがハンパない。

ただ黙ってるだけなのに空気がピリピリして、三井先輩も藤井先輩もずっと腫れ物に触るように接している。

私のせい？なわけないよね初対面だもん。

なんかものすっごいめんどくさいカンジ。

「中井先輩、伊藤先輩の思春期スイッチが押されていて怖いので帰って良いですか？」

小さな声で言っただつもりだったのに聞こえたらしい。それまでそっぽを向いていた伊藤先輩とバッチリ目が合ってしまった。

やばい。

身の危険を感じたのでとりあえず何事もなかったかのように笑ってごまかした後そのまま退室した。

そして人生最速のダッシュで帰宅した。

きつと初めてあった新入生のことなんて次回までには忘れてくれると思います。

2。蝶の夢

お昼休みは学校探検がてらあちこちでお弁当を食べることにしている。

学校通の中井友美ちゃんに案内役をしてもらって、入学試験で仲良くなつた松村有里ちゃんと、同じ中学出身の山口美幸ちゃんとで食べます。

今日は体育館のステージの端っこ。

体育館は飲食禁止ですが、ステージ脇は人が来ない絶好の隠れ家だそうです。

校内放送もちゃんと流れてます。

「あ。蝶の夢だ！梶川愛、踊ります！」

スピーカーから流れてきたのは、最後のバレエコンクールで踊った曲だった。

幼稚園から始めたモダンバレエは2年ちょっと前まで私の生活のほとんどだった。

8月のイベント公演、9月の発表会、10月の芸術祭、11月の海外公演、12月のクリスマス公演、1月には教室選考があつて、選ばれれば2月からのコンクールが全国までいけば3月末まで続くことになる。

お金がかかっていることは分かっていたけど、ひとりっ子だから大丈夫なのかな？と深く考えたことはなかった。

中1から中2に進級した春休み、お父さんに「話がある」と言われて初めて知った。

私のバレエのせいで家にはもうお金がなかった。

「お前が本気でバレエを続けるつもりなら今後は借金でもなんでもして賄ってやる」そう言ってくれた。バレエ教室をかえても良い、宝塚音楽学校を受験したって良い、でも学生らしい生活のない人生

を選ぶことに後悔がないかだけが気掛かりだ、よく考えなさい。

それまでは、このままバレエを続けながら高校に行つて、卒業したらバレエ教室の推薦枠でロシアに留学して、帰ってきたらバレエ教室の先生になるもんだとばかり思っていた。

でもそれはそれでものすごく贅沢なことで、ちゃんとした考えもなしに選んで良いことではなかったことに、私はそのとき初めて気づいた。

よく考えて、高校生になることにした。

優秀な高校生になって、学生らしい生活もバツチリ堪能して、できれば推薦入試で国立大学に入って、奨学金で薬剤師とか安定感のある職につきたい。

お父さんお母さん見ていてください。愛は2人に後悔はさせませんよ。

バレエは大好き。

でも私にはもつと違う生き方もあるはずだ。

ニーアップをふわりと決めたら足の甲が痛かった。

悲しいような、いっそ清々しいような。

踊り終わって、くるくるーとターンでみんなのところに戻ると、おや？人が増えている。

中井真先輩と伊藤和也先輩だ。
がーん。

…ぜつたいどっかでパンツ見えてるわー。

3. ミシンかたかたシュークリーム

1年生で創己会に入ったのは私だけ、人材育成枠なので実務ではなく雑用が主な仕事です。

今は5月に行われる運動会に向け、創己会のネーム入り腕章を製作中。

イマドキ女子は縫い物が苦手らしく、おかげで自宅から持ち込んだロックミシンとコンピュータータミシンで基地をつくり大変居心地の良い空間のなかひとりで作業しております。

腕章なんて、バレー時代に作らされたブツに比べればギャザーもないスパンコールもないし、ちよろいモノですよ。おほほほほ。

「ご苦労様。ゴメンね手伝えなくて。シュークリーム買ってきたしコーヒー入れるから休憩して?」

優しい三井先輩がさらさらの髪を揺らしながら甘やかしてくれたりもするし。

創己会サイコー!

高校生活サイコー!

高カロリーサイコー!

コーヒーにも砂糖とミルクをたっぷり入れてあまあまにするのだ。うふふ。

目の前で中井先輩が「入れすぎ!」と呟こうが伊藤先輩がどん引いていようが気にしない気にしない。

むしろ手をつけないならそのシュークリームも私にちょうだいちょうだいなのだ。

ニコニコと笑顔をはりつけたまま、まずは中井先輩をロックオン。

「…欲しいの?」

うんうんうん。

じゃあ…、と中井先輩がお皿をこちらに差し出してくれようとしたとき「待て」と伊藤先輩の声がした。

「俺のをやる」

なぜかどこかで思春期スイッチを押されたらしくめんどくさいカンジに機嫌が悪くなっている。

中井先輩しか見てなかったので全然気づかなかったけど、何がスイッチだったんだろ？

伊藤先輩の機嫌が悪いと室内の雰囲気が悪くなるので今後の対策のためにも何がスイッチか分かると良いんだけど？

でもせっかくなので気が変わらないうちにいただけのモノはいただこう。うふっ。

中井先輩と伊藤先輩のシュークリームがのった皿を左右の手にひとつずつ持って「三井先輩、コーヒーおかわりくださいねっ？」と振り向くと、三井先輩がどこかでおもしろスイッチを押されたらしく、やたらとバカウケ中だった。

4. 私たちは違う道を選んだ

美波ちゃんが訪ねてきた。

「愛ちゃん……」

私の顔を見たときたん泣き出した美波ちゃんを私は抱きしめた。

「大丈夫だよ。泣かないで」

美波ちゃんは私がバレエを辞めてから2年連続センターを踊っている。今年のコンクールではソロパートも付いた。でも残念ながら結果は期待されたほどではなかったそうだ。

そのことで他の研究生にずいぶんつらく当たられているらしい。

「もし連絡があったら、できれば励ましてやってほしいの」と美波ちゃんのお母さんに電話で頼まれたのは、4月になったばかりのことだった。

私がセンターだったときにはむしろ美波ちゃんが私をイビリ倒していた。

お嬢様育ちで悪気はないんだろうけど、それなりに悪意を感じる人でした。

……。
もう過去の話です。

それに高校生のいまセンターで踊るということは、バレエ教室のリーダーであるということ、それは中学生の私がセンターだった時よりもはるかに重たい意味を持っている。

だから、お世話になったバレエ教室の先生たちのためにも、私は彼女を励まして前を向かせなくてはいけないと思う。

「ねえ美波ちゃん、中1の時のコンクールで踊った蝶の夢を覚えて

る？あれからもうずいぶんたったよね。私はバレエを辞めて、美波ちゃんはずっとバレエを続けてきた。いまの私はもうニーアップも上手くできないし、美しいポアントもできない。でも美波ちゃんは違うよね？いまの美波ちゃんがセンターなのは、努力を続けてきたからだよ。私がセンターだった時より、他の誰より、その場所が相応しいからだよ？」

美波ちゃんは、本当はいない私と自分を比べて苦しんでいる。

バレエを辞めずにたゆまぬ努力を続けて高校1年生になった梶川愛。

そんな人はどこにもいない。

そのことを、ちゃんと理解しないといけない。

美波ちゃんも私も。

私たちは、違う道を選んだんだ。

5. 伊藤先輩は基本良い先輩です

「運動会の前に新入生テストがあるからゴールデンウィークに私の家でお泊り勉強会しない？」と友美ちゃんが誘ってくれた。

お泊り会！行く行く！

すっごい楽しみー。

「なんか良いことでもあったのか？」

めずらしく機嫌の良い伊藤先輩に聞かれた。

伊藤先輩は気がつくと突然不機嫌になってたりして時々すごいくめんどくさいカンジになるけど、基本優しくて良い先輩だということがだんだん分かってきました。

自分は食べないのにカワイイ後輩のために毎日おやつを持ってきてくれたりします。

…いや、別に餌付けされてないですよ。

「えへへー、ゴールデンウィークに友美ちゃんたちとお泊り会なんですよ。友達のお家にお泊りなんて初めてなのですっごいすっごい楽しみなんです」

そうか、良かったな。と微笑む伊藤先輩の後ろで、なぜか慌てた様子の中井先輩が唇に指で作ったバツ印をあてている。

はて？

それで誰の家に泊めてもらうんだ？と続ける伊藤先輩に「中井家です」と答えると、なぜか物凄い速さで扉まで移動した中井先輩を伊藤先輩がじっと見つめた。

「…ただの勉強会だよ」

「…」

「別にワザと黙ってたわけではないし」

「…」

「…」

「…」

「…お前も泊まりに来る？」

「考えておこう」

なんかいま緊迫してたなー、と思いながら伊藤先輩が剥いてくれた一口サイズのチョコレートをもうひとつ食べた。

6. 初恋のお話

お泊り会初日。

伊藤先輩も中井先輩の部屋にお泊りにきていた。

友美ちゃんの部屋には私たちがいるから、本日の中井家にはお父さんお母さんに高校生の子供が6人。

「順番にお風呂入ってたら夜中になるからあんたたち銭湯行きなさいねー」と言われて晩御飯の後にみんなで近くの銭湯に行くことになりました。

「私ホテルの大浴場とかは入ったことあるけど、おサイフ持って銭湯行くって初めてだ」とカミングアウトしたら、「愛ちゃんってもしかしてすごいお嬢様なの？」ってみんなに聞かれた。

「そんなことないよ。バレエやってる子の中にはすごいお嬢様もいっぱいいたけど、うちは庶民なので危うくバレエで破産するところでした」

「えー！バレエってやっぱりそんなにお金かかるお稽古事なんだ」
「最初はレッスン費と発表会の参加費くらいんだけど、そのうち海外公演とかに参加するようになったらドーンとね。…そういえば海外公演っていえば今でも忘れられない初恋の話があるんだけど聞く？」

それは私が小学6年生で海外公演に4回目の参加をした時のこと。

ステージを終えてみんなを着替えているところに男性がやってきて、ほぼ真っ裸の私に「エクセレントなんかかんとか」と言いながらキスをした。

ちなみに私にとってはファーストキス。

その人は小さな顔と長い手足を持った細マッチョイケメンで、世界的にも期待されている若手天才バレエダンサーだったから、みんなは私のことをラッキーだって羨ましがってた。

だってものすごく高く跳んでおまけに止まってるみたいに見える人だったのよ。

私もぼーってなって、これが恋なのね…、とか思いながら着替えて廊下にでたら、その人がムキムキマツチョな彼氏とすごい濃厚なちゅーをしている真っ最中で。

「初恋はおよそ5分で終了しちゃった」

この話、バレエダンサーにとってはなんてことないバレエあるあるだけど、バレエと関係ない人にとっては突っ込みどころ満載の衝撃的な話みたいで、いつ話してもウケが良いんだよねー。

今回もウケた。

特に伊藤先輩の反応は激しかった。

お楽しみいただけただけたようで良かったです。

7. 女子会議

お風呂でムネおつきいねーとかエロいチエックを入れつつ楽しく過ごしていたら、友美ちゃんに「愛ちゃん彼氏はある？」と聞かれた。

「いないー。でも彼氏ほしいなあ。美幸ちゃんはいまでも秋本くと付き合ってるの？」

「えっ！美幸ちゃん彼氏いるの？」

「中学のとき付き合ってたよね？」

「愛ちゃんなんでそんなこと知ってるの…。いちおう、まだ別れてはないよ、たぶん。でも学校が離れちゃったし、これからどうなるかわかんナイ…」

「そっかあ、さびしいねー」

「なんかオトナ。友美ちゃんは彼氏いるの？」

「いない。いたことはあるけど別れた。有里ちゃんは？」

「彼氏なんていたこともないよー」

「そっかあ。有里ちゃんは私と一緒にだ。はやく彼氏ほしいねー」

「…伊藤先輩とかどう思う？」

「えっ？友美ちゃん伊藤先輩が好きなの？」

「違う！私じゃなくて！」

「あのね愛ちゃん、友美ちゃんは伊藤先輩が愛ちゃんのこと好きっぽいって言うてるんだよ」

「ええっ?! そうなの？」

「やっぱり美幸ちゃんもそう思った？」

「うん。でも愛ちゃんはぜったい気がつかないだろうからほっとくつもりでした」

気づかんかった。

でもこれは…。

「彼氏ゲットのチャンス…」

「いや待て愛ちゃんはやまるな」

「そうだよ。もうちよつとちゃんと考えないと」

「そもそも愛ちゃんは伊藤先輩のことどう思ってるの？」

「先輩のこと…？」

いち。先輩は時々めんどくさい。

に。先輩はたくさんおやつをくれる。

「たまに機嫌悪いとめんどくさいけど、良い彼氏になりそう」

…いえ、別に餌付けされてませんよ。

「愛ちゃんは明らかに恋愛感情とは違う基準で言ってるような気がするんだけど？」

「まあ、人それぞれの基準があるから一概に否定はしないけど…」

「とにかくはやまらない。伊藤先輩の気持ちだってまだ本当のところは分からないだし」

そうか。

まだ分からないのか。

めくるめく男女交際の世界がひろがるのかと期待したのに。

…ちっ。

「…愛ちゃんが舌打ちした」

「黒梶川愛だ」

「思いのほか腹黒いね」

失礼な。

8. ヤキモチスイッチ

ロビーでさっそく伊藤先輩の気持ちにあれこれ探りを入れようと思っ
たら、中井先輩に「ちよつとゴメン」と止められてしまった。

「友美。お前何を言った？」

「なんていうか、本当はもう少し穏やかにゴールデンウィークを過
ごしたかったんだけど、愛ちゃんの反応が予想外で…」

「…。ちよつとあつちのほうで話そうか？」

中井先輩と友美ちゃんはロビーの隅っこですいぶん長い間話し合っ
ていた。

なんとなく、友美ちゃんが説教されてるくさい。

中井先輩の口が小さくアタマイタイと動いた後で「梶川さんちよつ
と」と手招きされた。

「話はだいたい聞いた。ええと、俺も和也と直接そのことについて
話したことはなくて。まわりが言うことではないし、きっと本人が
言うと思うから、あの、悪いんだけど、今回の話は聞かなかったこ
とにして、もうちよつと和也の出方を待ってて欲しいんだけど良い
かな？」

こんなにまわりくどくて歯切れの悪い中井先輩はめずらしい。
どうやらセンシティブな問題らしい。

「わかりました」

振り向くと伊藤先輩が激烈にカンジ悪くなっていた。

「これってヤキモチかなあ？」

だとしたらかなり単純なヒトなんじゃないの伊藤先輩って？

「ところで、僕の平和が守られるように和也に言い訳をするとしたら何を言えば良いと思う?」

「伊藤先輩の誕生日って分かります?」

「...? 8月24日だけど?」

「じゃあなんか聞かれたら、伊藤先輩の誕生日まで秘密って言うといってください」

あとはあのめんどくさいのをどうするかだ。
ふうむ。

私は伊藤先輩の前まで行くと、肩にかけていたバスタオルを外してくるーっとターンした。

「先輩、カワイイですか?」

かわいいと思うのよ? ふあふあもこのパーカーとショートパンツとレッグウォーマー。

「カワイイ後輩にぜひコーヒー牛乳を買ってください」

コーヒー牛乳はおいしい。

伊藤先輩は良い人だ。

はやく告白とかしてほしいな。

9。 はじまりはじまり

勉強会という名目で中井家にお邪魔させていただいている以上、やはり恥ずかしくない成果をあげたい。

いつもより気合い入れて勉強させていただきました。

…中井先輩にもお泊り会の間はおとなしくしててってクギさされちゃったし。

「愛ちゃんつて、とりつかれたように勉強するんだね」
有里ちゃんがちょっと引き気味です。

勉強に入り込みすぎて、友情をお留守にしちゃった？

「んー、そんなことないよ？」

これからもうちょっと気をつけよう。

後は適当におしゃべりしながら勉強した。

楽しかったけど、ぬるま湯のような心地良さに不安になって、なかなか寝付けない。

暗記モノだけちよつとやってからもつかい寝ようかな、と思いついて、単語帳と歴史年号帳を持って部屋を出た。

中井家の2階には子供部屋とは別にセカンドリビングがあって、私たちはそこで勉強会をしている。

集中して勉強していると、だんだん心が落ち着いてくるのがわかった。

そろそろ眠れそう。

ふう、とため息をついたとたん、「終わったのか」と伊藤先輩に声をかけられた。

!!!!!!

びびびびっくりした！

大声を出さなかったってもはや奇跡だし！

「あまりムリするな」

「…もう終わりますよ？」

「勉強のことだけじゃない」

…背中が逆立つってこういうことをいうのかもかもしれない。

「なんのことかわかりません」

「そうか。…でもムリをするのは感心しない」

「少しくらいムリしないと後悔しそうで不安なんです」
言い過ぎました。

伊藤先輩は「そうか」と呟くと、私の頭をひとなでして、キャラメルをひとつ剥いて食べさせてくれた。

…。

どうしよう。

こんなつもりじゃなかったのに。

…。

この人のことを好きになったかもしれない。

10. あぶないあそび

「甘いもの食べたい」

じっ…、と伊藤先輩を見つめる。

いまは私と伊藤先輩しかいない。

中井先輩がコンビニまでアイスを買に行ったとたん、ほかのみんなは勉強会をやめて友美ちゃんの部屋に行ってしまった。

「これしかないけど？」

と言いながら先輩は皿の上のチョコをつまんだ。

「…ダメだ。とけてる」

ずっと出しっぱなしだった生チョコは先輩の指先でとろりと崩れてしまった。

「いま真がアイス買って戻ってくるからそれまでガマンしてる」

「やだ」

「そんなこと言ってもこれじゃ食べれないだろ？」

ほら？とチョコで汚れた指先を差し出してくる。

「食べれるもん」

先輩の手首を掴むと、その指先をぺろりと舐めた。

人差し指と親指を丁寧に舐め上げて口に含むと、先輩が凍りついたように動かなくなった。

「…先輩、美味しい。…もっといっぱい食べたいな？」

掴んだ手首に頬をよせて、先輩の顔を見つめた。

つぎの瞬間、風のように現れた中井先輩に友美ちゃんの部屋へ放り込まれた。

「いますぐ4人もそこに正座しなさい」

無表情の中井先輩の前に並んで正座する私たち。

「どういふことか説明してもらおうか」

「えっと、ちょっとばーいずらぶマンガごっこを…」

「黙れ」

説明しろって言ったくせに黙れって言った。

「友美、いい加減にしないとお前のその腐れマンガ全部焼いて灰にするからね。松村さんと山口さんも、こういう悪ふざけは絶対にダメ」

それから、といいながらこっちを見た中井先輩はとつても怖かったです。

「梶川さんも、お泊り会の間は大人しくするって約束したよね。まして梶川さんは女の子なんだから。和也のスイッチが入ったらどうするつもりだったの？」

それはそれでありかなと思っただけけど…。

「ごめんなさい」

中井先輩が怖いので謝ったとききました。

そーっと少しだけドアを開けて覗くと、伊藤先輩がさっきと同じ姿勢のまま指先を見つめて固まっていた。

「やり過ぎちゃった？」

「当たり前だ。…この後どうする？」

「知らん顔でアイス食べたら夢だったか思ってたことがなかったことにならないかなー？」

「それは無理だろう…」

でも他になにも思いつかなかったのでもそのまま実行しました。

11。梶川さんのお母さんって…

お泊り会二日目の夜、突然お母さんが中井家に現れた。

「お母さん何しに来たの？…なにこの荷物？」

「お土産よ。お。み。や。げ。おかげ様でパパと2人で楽しく旅行に行かせていただきました。…で、中井さんにお礼を兼ねてお土産を買ってきてみました」

それにしたって段ボール2箱はいっぱい過ぎでしょ…。

「食べ物ばかりだから消えてなくなるわよー。食べ盛りの高校生が6人もいるんだから、明日の解散までにはほとんどなくなっちゃうわよ。ヘーキヘーキ」

「そのうちの過半数は女子だし、愛たちは勉強会をしているのであって柔道部の合宿をしているのではありませんよ？」

お母さんは「良いから良いから」と手をパタパタさせると、「…で」と真顔で続けた。

「男子2人はイケメン？」

「…」

ねえねえイケメン？と目を輝かせるお母さんのために、先輩たちに荷物を運んでもらうことになった。

「うわ、すごい分量だな」

「うちとしても、さすがにこんなにたくさん頂くわけにはいかないと思います」

「久しぶりの旅行でつい買い過ぎちゃったー。でもうちの分も同じくらい買ってあるから、受け取ってくれないと処理しきれないし、そしたらパパに怒られるから困っちゃう」

えへ？と嬉しそうに笑ってごまかさないのでお母さん。
なんだか鏡を見ているようで心が折れます…。

「とりあえず母を帰したいので受け取ってください」と先輩たちに
1箱ずつ持って行ってもらった。

先輩たちのお尻を眺めたおすのはやめて欲しいと思いつつ「想像通
りのイケメンでしたか？」と聞くと、お母さんはムフフと笑った。

「想像とはタイプが違ったけど、2人ともカワイイわー。やっぱり
若いと肌のキメ細かさが違うわねー。ああ、目の保養になった。今
度はうちでお泊り会してもらおうと」

うちでお泊り会しても中井先輩と伊藤先輩は来ないよ？と突っ込む
前に中井家のお父さんお母さんがみんなを引き連れて出てきてしま
った。

「すみません、あんなにたくさん気を使わせてしまって…」

「いえ、ご挨拶が遅くなりまして、梶川愛の母でございます。娘が
いない間に主人と旅行に行きましたらつい買い過ぎてしまいました。
どれも美味しいと思って買い求めた品でございますから、ぜひみな
さんで召し上がってみてくださいね？それに次回はうちでもお泊り
会をしたいと思いますからその時には遊びに来てください。では本
日はこれで失礼いたします」

びっくりよそ行きモードの挨拶を口からさらさらと垂れ流して颯爽
と帰っていかれました。

「梶川さんのお母さんって…」
黙れ。

中井先輩が私の逆鱗を刺激しそうだったので無言で制圧しておきま
した。

12。ちゆ

お泊り会の最終日。

昨日お母さんが持つてきたお土産のなかに能登牛が大量にあったのでバーベキューが行われることになった。

なんかゴールデンウィークの思い出づくりをやってこい的な意図が見え隠れしているような…。

考え過ぎ？

もう勉強会ではなくなっちゃったなーとは思っけど、中井先輩と伊藤先輩が家庭教師をしてくれたおかげでそこそこはかどったし、まあ良いや。

みんなも楽しそうだし。

肉祭り絶賛開催中です。

あれ？

でも伊藤先輩がいない。

お手伝いときはちゃんとしたのにな？

「中井先輩、伊藤先輩は？」

「あー、たぶん俺の部屋。寝てると思うわ。あいつ梶川さんのせいで寝不足気味だし」

呼んできてよ、と言ってる間も視線は肉から離れない。

…？

なんで伊藤先輩の寝不足が私のせいなんだろう？

…はっ！

中井先輩が私に伊藤先輩との接触を許可するなんて…。
恐るべき能登牛の魅力！
グツジョブ！

さ、中井先輩の気が変わらないうちに伊藤先輩に悪いことしに行かなくちゃ。
やったね。

…伊藤先輩ホントに寝てるわー。

あれあれ？

いつもよりカワイイ。

なぜ？

…。

目を閉じてるからかなあ？

伊藤先輩、なんかむやみやたらと目力強いんだもん。

…たまに見透かされたみたいで怖くなる。

まつげ長いなー。

眉太い。

鼻はゴツイけど鼻筋はきれいに通ってる。

というか顔全体がそんなカンジ。

いっつこいつこのパーツが全部ゴツイのにキレイに収まってて。

おまけに背が高いわりに顔が小さいよね。

…よく寝てる。

ちゅーしても起きないんじゃないかしら？

ちゆ。

ホントに起きないや。

びっくりしてくれないと私ひどい変態みたいだわー。
がつくし。

…もうイヤや。

「伊藤先輩、起きないとお肉なくなっちゃいますよー。はやく起きてくださーい」
ゆさゆさゆさ。

伊藤先輩はゆっくり目を開けるとまっすぐに私を見た。
ちよつと怪訝そうに。

「いま…、俺になにかしなかったか？」

ちらり、と私の口を見た気がする。

あちゃー。

「揺り起こしました」

「いや、そうじゃなくて…。…。や、良いんだ。寝不足で変な夢を見ただけだ。…ゴメン」

言いながら真っ赤になって口を覆う。

「夢ってどんな夢ですか？」

ねえねえどんな夢？と言いながら顔を覗き込むと、伊藤先輩は真っ赤な顔で口を覆ったまま私の口を見てゴクリと喉を鳴らした。

「…。…なんでもない。…それより、そうだ、肉食いに行かないと肉食いに行かないと、と非常にわざとらしく連呼して伊藤先輩は部屋を出て行った。

あぶなかったー。

あやしく変質者みたいになるところでした。

13. そういつつもりではなかった

朝の創己会室ならたぶん誰も来ない。

そう思って、いつもより1時間はやく登校した。

実際、予想通りだったわけですが。

私は鞆からお弁当用クーラーバックを取り出した。

でも中身はお弁当ではない。

保冷剤。

タオル。

濡れタオル。

目薬。

ちゃんと揃ってる。

ストレスを軽減するためにはいくつかの方法があるそうだ。

ストレスについて誰かに聞いてもらう。

ため息をはく。

笑う。

そして、泣く。

とにかく出す行為が有効らしい。

実際、泣くと涙と一緒にストレス物質が排出されるそうだ。

泣くというのはなかなか良い方法だと思う。

ひとりにさえなれば他人に迷惑をかける心配がない。

というわけで。

なんだかどうしょうもなく行きづまってしまって胸が苦しいので、
平和的解決を求めて泣いてみようかと思った。

うちのお父さんを安心させるのは、新入生テストで1番をとるより難しい。

…お父さんも後悔したくないんだろう。

それは私も同じなんですけど。

物理的に解決できない問題って難しいよね？

高校受験が終わったいま、バレエを辞めた穴を埋めるのは思った以上に難しい。

梶川愛は泣きます。

30分後、携帯のアラームが鳴った。

そろそろ目を冷やさないと、泣いたことが一目瞭然の姿で教室に行くことになってしまう。

それは大変好ましくない。

お父さんから心配されているだけでもしんどいのに、友達にまで心配をかけるなんてありえない。

友達にウソ八百の言い訳をするのはツライ。

私は私なりに友達を大切にしたいと思っただけ。

目の上に用意しておいた濡れタオルと保冷剤を重ねて置いた。

…眠い。

泣いたのは失敗だったかも。

…泣くと眠い。

…。

ぐー。

「梶川…？」

はっ！

目を覚ますと開いた扉のところに伊藤先輩がいた。

…ここどこ？

…。

！

やばい！

「いま何時ですか?!」

「え？12時半くらいだけど？」

さいあく。

人生初サボりです。

14。けっこつやらかしたね…

早朝の創己会室に隠れひとりで泣いたら居眠りこいて学校を半日サボってしまった。

昼休みに伊藤先輩が声をかけるまで爆睡でした。

これってやばいよね？

慌ててお母さんの携帯に電話をかける。

「もしもし」

ほぼゼロコールで繋がった。

その意味に血の気が引く。

「もしもし。愛です。あの、生徒会室で勉強してたら居眠りしてしまっ

「先生には登校途中で具合が悪くなったみたいですから言っているから大丈夫よ？いちおう、具合が良くなって本人がどうしてもって希望するなら登校させるけど、親としては念のため様子を見たいので欠席させるつもりですとも言っているから、この後は愛のしたいようにしたら良いと思うけど、せっかくだからサボっちゃったら？」

百点満点の言い訳をありがとうお母様。

「でもさすがにサボるわけには…」

と思ったけどムリだ。

ひどい顔してる。

鏡を見て愕然とした。

目のまわりが赤い。

居眠りしてきちんと冷やさなかったからだ。

ステロイド入りの軟膏とかも用意すべきだった。

…いやそういう問題じゃない。

「サボります。この件お父さんには？」

「言っていないし言うつもりない。あのね、パパは愛に一点の曇りもなく幸せになってほしいと思ってる親バカも甚だしいヒトなんです。だから、気にしないで良いのよ？」

昨日、新入生テストの順位が書かれた成績表を手に困惑気味な様子で「もつと普通で良いんじゃないか？」と呟いたお父さん。

普通ってなに？

「分かってる。ありがとう」
気持ちを遮断して電話を切った。

…あとは伊藤先輩をどうするかだ。

間違いないイロイロとまずい現場を押さえられてしまった。
こういうときの伊藤先輩は怖い。
ふせておきたい感情を見透かされる気がする。

そういうの苦手。

攻撃的な自分が出てくるから。

出来れば誰も傷つけない。
伊藤先輩のことも。

…それから自分のことも。

15. エスケープ

「泣いてたのか？」

心配してるのか呆れてるのかよく分からない声で言われた。

そりゃ、濡れタオルやら保冷剤やらの後始末グッズを並べて泣くなんて、呆れるよねえ。

「えっと、ちょっと新車のストレス解消法を試してみたんですけど、思いがけず爆睡してしまいました…」

えへへ？と笑ってごまかしたけどダメっぽい。

…なんかお怒りっぽい。

怖いし。

「ムリするのは感心しないって言わなかったか？」

「あの、べつになにかムリしたから泣いたわけではないです」

「じゃあなんで泣いてたんだ」

そういう追求やめて欲しい。

伊藤先輩には関係ない。

みたいな攻撃的な言葉が口滑って出そう。

「お年頃だからかなー？」

ボケてごまかすつもりだったのにトゲのある声になった。

…ちよつとイラつとはしてるし。
失敗した。

伊藤先輩、分かりやすく傷ついた顔しないでください…。

「スミマセン…」
なんか自分自身のふがいなさに泣けてきた。
涙腺に道がついちやっただカンジ？

「いや、俺こそ」
と伊藤先輩がなにか言いかけたところで昼休み終了5分前の予鈴が鳴った。

もうちよつと落ち着いてねばれば時間切れだったのに…！
ちよつとしょつく。

と思ってる前で伊藤先輩は電話をかけはじめた。

「真？悪いけど俺体調悪いから帰ったことにしといて
え？

「鞆？適当に隠しといて。うん。じゃあそういうことで
そういうことってどういうことだオイ。

「じゃあ梶川は帰るしたくしろ」

…つむを言わせぬ口調ってこういうことなんだろうな。

一方の伊藤先輩はテキパキと棚からファイルに入ったプリントを何枚か選び出すと、フィルムファイルにまとめてから付箋を取り出してなにかメモして貼って創己会長席に置いた。

次に各委員会の名前が書かれた名札を机に並べていく。

そういえば今日は放課後に運動会運営についての創己会議があるんだった。

つまり、伊藤先輩がやっているのは本来私がやるべき仕事だ。

「あの、私やります」

「帰り支度は済んだのか？じゃあ保温ポットと湯呑み人数分出しといて」

伊藤先輩はポットにもメモした付箋を貼った。

続けざまに黒板に今日の議題と会議内容を書いていく。

達筆なうえに速い。

会議内容が完璧に頭にはいつているらしい。

一切メモとか見ないし。

「じゃ、行くか」

「え、そういうわけには」

「コピーとお茶くみは三井と藤井にふつといたから」

それはありがとうございます。

でもそうじゃなくて伊藤先輩までサボる必要ないよねってことを言いたかったんですけど？

「ここでグズグズして俺と一緒にサボってるところを見つかりたいならここに居ればいいだろうが、俺個人としては5限が終わる前にエスケープできたほうがありがたい。分かるか？」

…。

私もそのほうがありがたいです。

16. おやつでキョン

なんだか意図しないまま学校をサボることになってしまった。

伊藤先輩と一緒にだなんてバレたら生活指導室直行？

ぴーんち。

と思ってるわりにちゃっかり伊藤先輩のお宅にお邪魔しているワタシ。

だって朝から大泣きして赤パンダなのにお母さんのいる家には帰れないし、下手に外うるうるして補導されたり通報されたりしたくないし。

うん、しかたないしかたない。

伊藤先輩が連れてきてくれたんだもん。

伊藤家のご両親は2人とモシステムエンジニアで頻繁に出張があるうえに普段も夜10時前に帰宅したら早いほうなんだって。

そして伊藤先輩の家が私の通ってた小学校区内にあっつてびっくりでした。

小学校も中学校も同じとこ通ってたってことだよな？

ぜんっぜん知らなかったんですけどー。

「俺は名前だけは知ってたけどな。梶川愛は有名人だったし」

はー、私って有名人だったんだ。

「だから、最初に顔合わせした時はバレエで学校行事すらまともに参加してなかったくせにうちの高校に首席入学できるってなにそれ、とか思ってたイラっときた」

こわ。

「でもすぐいっぱい勉強したんですよ？」

「いまはそうだったんだろうと思うけど、その時はバレエ辞めてるなんて思いもしなかったから」

だよー。

私も辞めるなんて思わなかったし。

「なんで辞めたんだ？」

「ものすごいお金がかかるからです」
「…」

「あと父も、私が普通の学校生活を送っていないと気にしているよ
うでしたから。で、バレエダンサーからリア充高校生にジョブチェ
ンジしてみたんですけど、なかなか修業が足りないみたいで…」
やばい。

また泣けてきた。

このネタは泣ける。

「梶川はムリしすぎ。見ててたまに腹立つ」

そっいいながら、缶入りクッキーを開けて1枚食べさせてくれた。

なんでだろう？

先輩におやつをもらうと心臓がキュンってなる。

やっぱり好きなのかな？

じ、と見つめてたら目が合った。

「もう1枚食うか？」

いや、そういう意味ではなかった。
でも食べます。

あーん。

もぐもぐしてたら伊藤先輩が赤くなって目をそらしてしまった。
いまのスイッチまじ分からん。
なんで赤くなっただろ？

17. あーん

「そういえば梶川昼飯まだだろ？」

「はい。でも今日はクッキーたくさん食べたしお昼抜きにします」

「…お前、食事とおやつとの配分がおかしい」

「ご飯とおやつ両方がっついてたら太るじゃないですか」

「…」

伊藤先輩は無言でリビングからキッチンに移動するとでっかい冷蔵庫からトレーに乗った食事を取り出して電子レンジで暖めて運んできた。

トレーを私の前にずいっと出して一言。

「食え」

…。

たぶん、これは伊藤先輩の晩御飯用にセットしてあったんじゃないかしら？

見るからに食べ盛り男子1人分ですし。

「えっと」

「食え」

今度は箸で煮物をつまんで私の口の前まで運んできた。

これはあれかな？

食べさせてくれるつもりなのかな？

なぜか伊藤先輩はおやつするときいつも私の口までおやつを運んでくる。

いつかい手で受け取ろうとしたら不機嫌になってめっちゃ怖かったので、それ以来私も口を開けて食べさせてもらうことにした。

あーん、ぼい、って一瞬のことだし。

むしろいまでは食べさせてもらったほうが美味しく感じるくらいで

す。

中井先輩がげんなり顔で見ている、三井先輩が笑いをこらえきれず吹き出している、藤井先輩が恐ろしいモノを見る顔で固まっています、ちゃんと美味しく食べられます。

もはや餌付けプレイです。

しかもかなりの胸キュンプレイです。

ちよつと前まで「…いや、餌付けされてませんよ」とかスカしてたのが遠い昔のことのようです。

いまやばつちり餌付けされた自覚があります。

恋心かどうかは経験不足でよく分かりませんが、伊藤先輩に食べさせてもらうのが大好きです。

なので、「ご飯も食べちゃおうと思います。

ぱく。

もぐもぐもぐもぐ。

「うまいか？」

「はい。とっても美味しいです」

満足そうな伊藤先輩の「うむむむ」を見ながら食べると本当にとっても美味しいです。

人としてのプライドを捨てることで実現する瞬間的幸福の訪れです。

でもちよつと友達には見られたくないな、と思うのは秘密です。

ところで伊藤先輩は私のことをどう思っているのかな？

気に入ってくれているとは思うけど、友美ちゃんたちが言ってくれたみたいに私のこと好きでいてくれるのかな？

というか好きは好きでも恋愛感情なんでしょうか？

飼育員が担当動物をかわいがるレベルの好きだったらどうしよう。

ご飯が砂の味になった。

「もうお腹いっぱいです」

「るーるー、な気持ちで伊藤先輩を見つめると、伊藤先輩はよしよしと頭を撫でてくれた。」

18。みんなの目の中にはちっちゃいおじさんが住んでいる。

学校に行ったら、とっても嬉しそうな友美ちゃんがいた。

「今日はステージ脇でお弁当ねっ」と笑顔で言われた時にちよつとイヤな予感がしちゃうくらい嬉しそうでした。

ステージ脇に行って座ったら、私以外の3人は当たり前のようにお弁当ではなく私を囲んで座った。

「昨日は伊藤先輩とナニしてたのかな？」

隣に座った友美ちゃんが嬉しそうに、かつ、いやらしいカンジに聞いてきたので思わずガン見しました。

友美ちゃんの頭にちっちゃいおじさんが見えるかと思って、見えなかったけど。

「きのう…」

どうやら昨日学校をサボったうえに伊藤先輩といたことがバレているらしい。

なぜだ？

「えっと、クッキーとお昼ご飯を食べました」

嘘は言ってます。

「他には？」

「何も」

「ナニも？」

「ナニも」

どうでもいいけど友美ちゃんの言いまわしが時々とってもセクハラです…。

「愛ちゃんは色気より食い気か…」とがっかりしているオヤジな友

美ちゃんとは対照的に、美幸ちゃんは女子力満点の笑顔で「お昼ご飯もあーんして食べさせてもらったの？」とナチュラルに原爆投下発言をした。

このテロリストめ…！

「そういえば美幸ちゃんは伊藤先輩が同じ中学出身なの知ってた？即座にスルーした後で友美ちゃんと有里ちゃんがニヤリと目配せしあうのを見て自分の浅はかさを痛感した。この場合はまず否定すべきだったみたいです。

顔が熱い。

「伊藤先輩は伊藤翔太君のお兄さんでしょ？」

…？

…え？

「え？」

「愛ちゃん、中学のとき翔太君に告白されてたよね」

にんまりと笑った美幸ちゃんに息が止まるくらいびっくりした。美幸ちゃんなんでそんなこと知ってるの…。このフリーズなんかデジャヴユ。とか考えつつ気が遠くなった。

次の瞬間、私との距離をぐぐつとつめてきたみんなの目の中に、ちっちゃいおじさんがいるのが見えた。気のせいじゃなく見えた。

「友美ちゃん、今日は充実したお昼休みになりそうだね？」

「有里ちゃんもそう思う？美幸ちゃん、知っていることは全部教えてね？」

「うふふ、私もたいしたことを知っているわけじゃないから、愛ちゃんに聞いたほうがはいんじゃないかしら？」

ぐぐぐっと距離をつめるみんなの目の中にあるちっちやいおじさんはエロ面で笑った。

19。伊藤さんと秋本くん

そういえば秋本くんは伊藤翔太と仲が良かった。
ぬかった。

「それで伊藤先輩の弟さんってどんな人？告白されたってどういうこと？」

「私は美幸ちゃんの彼氏の秋本貴土さんと伊藤翔太と同じ小学校の出身でした。以上。あとは記憶にないみたい」

「で、いつ恋がうまれたのかな？」

「よく覚えてないみたい」

「…どんな人が伊藤先輩に聞いたほうが良い？」
それはやめて。

「…この話、伊藤翔太というより秋本くんの思い出ですけど聞く？」

せっかくなので美幸ちゃんを道連れにすることにしました。

小学生の頃の私は伊藤翔太にイジメられていた。

「梶川ガリガリばあ」などの不名誉なあだ名をやまのようにつけられました。

なので、ジャニーズ系の容姿に加え足が速かった彼はクラスのボスでしたが、私はこいつ車にでも轢かれなかなーって思ってた。

…しかしなんで小学生って足が速いイコール偉いなんだろうねー？

ある日、クラスの男子が「ホントは男子限定だけど梶川は特別にまげてやる」と伊藤が好きか嫌いかアンケートを持ってきたことがあった。

好きコーナーはまだ空欄だったのに嫌いコーナーには正という字がたくさん書かれているのを見て、ボスザルは私以外からも嫌われて

いるのか性格悪いもんねえザマー三口、とか思いながら私は嫌いコーナーの正に1画線をたした。

その男子は次に私の横に座っていた秋本くんアンケートを差し出したんだけど、秋本くんは迷わず好きコーナーに一を書いた。

「翔太が梶川にしていることはバカみたいだと思うけど、俺にとつては親友だから世界中のヤツがあいつのこと嫌いでも俺はあいつが好きなんだ」

私の顔をまつすぐ見て言った秋本くんに、子供ながらなんて男前だと感心した記憶があります。

そういえば秋本くんは彼と一緒に私をからかったりしたことがなかった。

親友なのに。

「秋本くんスゴイねー」

私は嫌いコーナーに書いた自分の線を消して、好きコーナーと嫌いコーナーの間に線を書き直した。

秋本くんに免じて。

…で、中学校ではほとんど顔も合わせなかったのに、中学2年で発情期に入って頭がおかしくなった伊藤翔太にいきなり告白されたことがあったけど。

「むり」

断ったきりいまにいたる。

できれば金輪際かわりあいになりたくありません。

「…ね。伊藤翔太の話っていうより秋本くんの話だったでしょ？秋本くんはホント男前だよねー。美幸ちゃんと付き合ってるって聞いたときも、大和撫子な美人さん捕まえてさすがは秋本くんだぜ、と

思いました」

耳まで真っ赤な美幸ちゃんはとってもカワイかったです。
友美ちゃん和有里ちゃんが「ごちそういただきました」といやらし
く喜ぶくらいカワイかったです。
にやり。

でも伊藤先輩の弟って…。

伊藤先輩は私と伊藤翔太のこと知らないんだよね？
なんかブルーです。

20。女子高生って邪悪。

美幸ちゃんは頬を染めつつ咳ばらいをした。

「翔太君は本当はずっと愛ちゃんが好きだったんじゃないかしら？」

「それってツンデレってこと？」

ツンデレって定義はいくつかあるみたいだけど、この場合は好きだけど意地悪しちゃうっていう迷惑至極な幼稚園児的愛情表現を恋愛フラグに置き換えるための便利ワードよね？

それが通用するのは二次元か異次元の世界だけだと思います。

「むり」

そんな種明かしされてもちっともトキメかない。

むしろ引いた。

まじウゼエ。

「黒梶川愛になってる」

「悪い顔だわー」

「好きなら優しくして欲しいタイプだもん。嫌がらせしかしてない相手に恋愛フラグ立てようなんて頭おかしんじゃないかと思うわー」

おまけに存在自体が私と伊藤先輩との関係を微妙にしつつあるなんて許せん。

ボスザル死ね。

「たしかに伊藤先輩は愛ちゃんにあまあまだよねー」

「そうだねー。愛ちゃんにはあの餌付けプレイもたまらんのだろう」

ねー」

「伊藤先輩の弟との三角関係なんてすごいごちそうだったのに、顔も見ないで消えキャラ決定なんてザンネンだねー」

「ホントザンネンだねー」

「そうかあ。ダメかあ。…でも運動会に来るから顔は見られるよ？」
「なんですと？」

「貴士君から翔太君と見に行くからっておとといメールがきてて、本当は昨日その話をしようと思ってたんだけど、愛ちゃん学校サボっちゃったから…」

「ところでなんでサボりって分かった？」

「昨日の朝、この話をしたくて学校についてすぐ愛ちゃんの下駄箱開けて学校に来てるの確認しちゃった」

「…」
間接的ながらこれも伊藤翔太のせいだと思いました。
やっぱり死ね。

「じゃ、なんで伊藤先輩といたって分かったの？」

「昨日うちの兄貴がやけにキレ気味だったから？」

「あとはぶっちゃけあてずっぱです」

「今朝の愛ちゃんがちよつと挙動不審だったのでカマかけてみちゃった」

「…」

知らない間に自分で墓穴掘ったらしい。
今度から気をつけよう。

「でも思ったよりつまらない話だったね」

「あとは運動会当日のイトウシヨウタくんのがんばりに期待しよう？」

「アキモトタカシくんも見られるよ」

「できるだけたくさん恋愛フラグ立つとイイね」

「そうだね。でも立ちそうになければ立てに行くだけだねっ」

女子高生って邪悪。

伊藤先輩との少女マンガな学生ライフを夢見る私にもっと善良なお友達をクダサイ。

21. 梶川愛改造計画

「なにやってんだ？」

あきれ顔の伊藤先輩と中井先輩を横目に、ヒジを肩と水平に横に突き出し、胸の前で合わせた手の平を力を入れてぐぐぐと押し合わせる。

「バストアップ体操です」

邪魔しないで下さい。

ものすごく大事なことです。

「それで三井先輩、これどのくらいやったら良いですか？」

「んー、いつかいつかいは短い時間で良いから、とにかくまめにヒマみつけてやったら良いと思うよ？」

私は痩せている。

バレエをやっていたときは体脂肪率一桁だったし、いまも18%くらいしかない。

結果、情けないことに体は限りなく少年体形に近い。

なので、ボンキュボンなニスバディの持ち主である三井先輩を師匠に肉体改造のご指導を受けることにしたのだ。

「甘いモンばっか食べてるくせに太りたくないって飯抜こうとしたり、かと思えば痩せてたいけどムネでかくしたいって、すごい矛盾を感じるんだけど」

ごもつとも。

でもそれが女子です。

伊藤先輩を夢中にさせたいんです。

って言ったらどんな反応するのかな？

伊藤先輩のこと好きかどうか確信できないのは、伊藤先輩が格好良
いからだと思う。

イケメン生徒会長に可愛がってもらってたら、誰だって嬉しいんじ
やないだろうか？

そう思うと、その程度の想いではうまくいかない気がして自分から
は告白できない。

カワイイ後輩ポジションに入ってるし。

とか思ってたんだけど、伊藤翔太が伊藤先輩の弟だって分かったら
急に不安になっちゃって。

むかし私に告白した伊藤翔太がいまどんな気持ちでいるかは興味な
いけど、ヤツのせいで伊藤先輩が私と距離をとることにしたらどう
しよう、とかすごい不安で。

友美ちゃんたちに相談したら、まずは色気不足をなんとかしようっ
てことになりました。

ムネがでかければイイってわけではないかもしれないけど、色気不
足と友美ちゃんが言ったときに有里ちゃんが私のムネを見たのは確
実です。

努力できることはなんでもやります。

髪は美幸ちゃんが行ってる美容院で整えてもらいました。無造作だ
けど女子っぽいカンジになるように肩の下あたりで揺れたりはねた
り動きがカワイくなるようにしてもらいました。

肌は自宅でエステをやっている有里ちゃんのお母さんにお手入れセ
ットを選んでもらいました。お化粧品まではしていませんがなんかキ
レイになった気がします。

友美ちゃんには、これ恥ずかしいかも、と思うことにこそ恋愛フラ

グが隠れている、とアドバイスされました。

いま恥ずかしいなー、と思うセリフがひとつあります。
できることならなんでもやる、というなら言うべきかもしれません。

「伊藤先輩を夢中にさせたいんです」

伊藤先輩も真っ赤ですが私も真っ赤だと思います。

恋の道はキビシイ…。

22. 仕込みは上々

運動会当日。

座席こそ大会実行本部にありますが、相変わらずの雑用なのでとくに決まった仕事はありません。

しかしあつちこつちからお手伝いやお使いの声がかかるので息つくヒマもなく、パシリをしていただけでもう運動会が終わろうとしています。

このお昼休みが終わったなら、あつという間にフィナーレのクラス対抗パレードです。

「疲れたー」

参加競技を1年女子全員参加の80Mハードル走だけにしといて良かった。

友美ちゃんがとめてくれてなかったら、うっかり3000M持久走に出るところでした。

持つべきものは事情通の友達です。

「自業自得。優先順位つけてちょっとは仕事断れ」

「できない仕事なら断りますけど、みんな忙しいのは一緒なんだからできる仕事ならやらないと」

「…机に突っ伏したまま言うな」

「イインです。もうあとはパレードだけですから」

「梶川のクラスの神輿は何がテーマ？」

「女神様の行進です」

小柄で愛らしい有里ちゃんが先頭で花をまきながら歩き、そのうしろをクラスの女子が並んで歩いたあと、背丈の同じ私と友美ちゃんが侍女として神輿の先導をして、女神様役の美幸ちゃんが神輿に乗

って進むんです。
ちなみに神輿は男子全員で担ぎます。

「なんか男子虐げられてないか？」

「人聞きの悪いこと言わないでくださいよ」と言いながらパレードの企画立案者である友美ちゃんがあらわれた。

「ほら愛ちゃん、ぼさっとしてないで着替えに行こ？」

ほらほら、といいながら腕を掴んで連れていかれました。
うう、疲れてるのにー。

しかし、目の醒めるような美人に仕上がった美幸ちゃんを見てとたんにテンションが上がりました。

「すごい！これは目の保養だわ」

愛ちゃんたら…、と恥ずかしそうに目を伏せるところがまたタマリマセン。

大きな花がたくさん重なったマキシ丈のワンピースにシフォンでキモノリーブをつけた梶川お手製リフォームドレスに、百円ショップの造花で有里ちゃんが作った花冠。さらに友美ちゃんがメイクして仕上げました。

なぜ友美ちゃんがこんなに上手にメイクできるのか疑問が残りますが、大満足の仕上がりです。

有里ちゃんは花柄のブラウスワンピースの中にふあふあしたパレオを入れて腰に幅広のサッシュ。

友美ちゃんと私は水色のメイド服に白いニーハイソックスです。

友美ちゃんがメイクもしてくれました。

…このメイド服、友美ちゃんの私物なんだよねー。

なぜこんな服をしかも2着も持っているのか疑問が残ります…。

他の女子は列ごとにテーマカラーを決めての私服参加と低予算なが

ら素晴らしい統一感。

ちなみに男子は全員学ランです。

…。

虐げてはないと思います。

「さて、仕込みは上々だし、張り切って恋愛フラグ立てに行くか」
こちらをチエックしながらの友美ちゃんの発言にちよつと不安を覚えただけ、なにはともあれフィナーレです。
張り切っていきましょう。

23。恋愛フラグか妄想か

運動会のパレードで特別賞をいただきました。
やったね。

パレードの後はグラウンドで撮影大会です。

やはり女神様役の美幸ちゃんは大人気で、他のクラスの人までちょっと写真撮ってます。

美幸ちゃん自身は彼氏の秋本くんはこの格好を近くで見たいみたいでちらちらと視線を送っていますが、他校生の秋本くんは遠慮しているのか近寄ってきません。

そういう人です。

出過ぎるようなマネはぜっつたいにしないでしょ。

隣に伊藤翔太さえいなければ呼びに行つてあげたいところなんだけどね。

「どつちがアキモトタカシくん？どつちがイトウシヨウタくん？」

ふいに友美ちゃんが耳元で囁くからぞわっとしました。

だつてなんか言い方がちょっとヤラシかったし。

眼鏡外してメイクしてメイド服つて見た目もかなりヤラシいけど。

「爽やかそうなのが秋本くん？どつちが伊藤翔太？」

「答えになってない。ま、イヤ。呼びに行こう」

どうぞご自由に、と言つたのに友美ちゃんと有里ちゃんに両側から腕をホルドされてしまった。

「むこうからしたら知り合いは愛ちゃんだけだもんね」

「ねー」

秋本くと伊藤翔太は近づいてくる私たちにびっくりしてるみたいに見えた。

仮装した女子3人が近づいてきたら誰でもびっくりするとは思っけど。

「秋本くん久しぶりだねー。美幸ちゃんにはいつもお世話になってます。…よかつたらもつと近くで見てあげて？ちなみにあの衣装は私が縫ったんだよ」

「え？あ？…もしかして梶川愛？」

「…もしかしなくても梶川愛です」

小学校以来まともに口もきいてないとはいえ、中学卒業してまだ2ヶ月なのに忘れられてたつて地味にしょっく。

伊藤翔太も固まってるし。

…まあ良いけど。

無視無視無視。

「初めまして中井友美です」

「初めまして松村有里です」

2人が挨拶をしている間も伊藤翔太はちらちらとこちらを見てくる。なんか不愉快。と思つてあさつてのほうを向いてたら大会実行本部のほうで写真撮影会をしているのが見えた。

伊藤先輩も三井先輩も藤井先輩も中井先輩もいる。みんな仮装してる。

…伊藤先輩がチャイナ服着てる。

写真欲しい。

「ごめん。ちょっと先輩たちのとこ行つてくる」

「え？愛ちゃん？」

人生最速ダッシュの記録を塗り替える勢いで本部まで行かせていた

できました。

ダッシュしすぎて止まるとコケそうなのでどさくさにまぎれて伊藤先輩に突進することにしました。

でもこちらに気づいた藤井先輩が伊藤先輩に注意するように促してくれたので、ちゃんと受け止めてもらえました。

身体を離す前に一瞬抱きしめてくれた気がしたのは妄想かしら？

「伊藤先輩、一緒に写真撮りましょう！」

そう言ったら伊藤先輩にデコピンされた。

愛がこもっている気がしたのは妄想かしら？

24。明日会いに行きます。

「愛ちゃん携帯かして」

運動会からの帰り際に友美ちゃんが私の携帯でどこかにメールを送った。

メアド直接入力してたけど、メアドを暗記してる相手って相当に大事な相手じゃないかな？

普通、携帯に登録してあっても覚えたりしないよね？

「いまのメールはドコに送ったの？」

「ど直球にあざとい愛ちゃんを見習って自分にフラグを立ててみました」

「は？」

「うまくいくかはわからないけどねー」

につこり笑った友美ちゃんがいつになく乙女に見えてびっくりした。

「ど直球にあざといって何？」

「あのね、愛ちゃんって計算上無謀なことでもやりたいことを反射的にやりに行くから」

「バカってこと？」

「小賢しくないってこと。私は賢く立ち回ろうとしてなにをやりたんだか分からないカンジになることがあって。でも愛ちゃんって普段はわりと構えてるのにいざというときすごい動物的というかシンプルになるからさすがだなって。欲しいモノを手に入れようと思ったら愛ちゃんのやり方のほうが良いんだらうなって思ったので、私ならしないようなことをしてみることにしました」

「つまり、メールの相手は友美ちゃんの好きな人？」

「愛ちゃんは伊藤先輩を好き？」

「…たぶん」

「じゃあ私もたぶん。なぜだかはよくわからないけど、むこうに私をそばにおきたいと思わせたいし、手に入れたいと思わせたいし、好きになってもらって夢中にさせたい。…たぶん好きなんだろうね」

友美ちゃんの言ったことはそのまま私の心にすんとおさまった。

たぶん好きなんだろうね。

曖昧さも身勝手さもテンコ盛りですが。

「でもなんで自分の携帯で送らないの？」

「別れるときに着信拒否指定にされたから？」

「前に付き合ってた人なの?!」

「そう」

「…。うまくいくと良いね」

「うまくいかなかったらなぐさめてよ」

メールの送信文はひとこと。

明日会いに行きます。

差出人の記名もなしに私の携帯から送って通じるんだろうか？

どうか通じますように、と友美ちゃんのために祈った。

「そうだ。このメールに関して一切うちの兄貴には他言無用でお願いします。…もしちらりとも匂わすような真似をしたら、イトウシヨウタくんの頭に恋愛フラグを突き立てるよ？」

友美ちゃんのために祈ったのにひどいこと言われた…。

今日、秋本くんは帰る直前に美幸ちゃんになにかをこっそり囁いた。美幸ちゃんが顔も耳も首も真っ赤になるようななにかを言っていました。

その様子を見て後片付けをしていた男子が多数がっかりしているのを目撃しました。

あいかわらず男前がハンパない人です。

一方の伊藤翔太は、私が伊藤先輩といるのを大変険しい表情で睨みつけてました。

意味不明でした。

できれば金輪際かわりあいになりたくありません。

中井先輩にはなにも言わない匂わさない、と心の中で唱えながら家に帰りました。

25。悪いのは私

代休あけの火曜日。

3限の移動教室からの帰りに先生から頼まれた雑用のおかげで、みんなよりだいぶ遅れて教室に戻るようになってしまった。

でも先生のせいだからそうそう怒られないだろう、と余裕がまして歩いてたら、偶然にも藤井先輩と一緒にあった。

そして廊下でいきなり藤井先輩の友達に叩かれた。

え？

「ヒナコ！」

藤井先輩が掴んだ手を振り払って立ち去った彼女の口が、アンタナント、と動いた気がした。

むかし、バレエで初めてセンターをもらったとき、それまでセンターだった6年生との間で同じようなことがあった。

その時は教室の玄関前の階段で後ろから突き飛ばされた。

びっくりして振り返ったら、いまと同じような表情で「あんたなんて死ねばいい」と言われた。

いつだったか中井先輩に「悪いけど和也の出方を待っててやって」といわれたことにはちゃんと意味があったのかもしれない。

それに、いままでずっと藤井先輩から距離を取られていたのはなんとなく感じていたし。

だから、私のせいなのかな、と思った。

「愛ちゃん、大丈夫？ごめんね、大丈夫？」

藤井先輩のほうがよっぽど痛そうな顔してる。

優しいなあ。

「大丈夫です。それよりお友達のところに行つてあげて下さい。藤井先輩、心配してくれてありがとうございます。あと、たぶん、迷惑かけてごめんなさい」

ゴメンね、ともう1度言つて藤井先輩は走つて行つた。

バレエの時にくらべると、いまのピンタなんてカワイイもんだ。

おまけに藤井先輩は彼女の友達なのに、心配してくれたし謝つてもくれた。

教室に帰れば、友美ちゃんや有里ちゃんや美幸ちゃんたち友達がいる。

…なのになんで私は泣くんのだ。

とりあえず人に見られるとなんなので、近くのトイレに隠れた。

泣きながらそんなことを気にする自分に感心するし、うんざりする。顔が腫れたりしていないことを確認して安心した。

さらに顔を洗うといくらかすつきりもした。

そつえば嫌なことがあつたときは首の後ろとか顔とか手とかを洗うんじゃなかつたっけ？

効果テキメンだ。

10分遅れで教室に入りながら、嫌なことがあつたときじゃなくて罪悪感を拭い去るために洗うんだつた、と思ひ出した。

なんかよく分かんないけどやっぱり悪いのは私だつたのかな、と思

つ
た。

26。友達がいて良かった。

4限の終わりに友美ちゃんから「今日もステージ脇でお弁当にしよう」と言われました。

友美ちゃんが元カレとよりを戻しに行った話が聞ける？とテンションが上がりました。

このテの話題ではいつも攻められるばかりなので、今日は攻めますにやり。

と思ったんだけど。

「…で、さっきの10分間の遅刻はなんだったの？」

なぜ私が攻められなくてはいけないんですかね？

「確実に良くないことがあった顔してたよ？」
「まじで？」

友美ちゃんがえすぱーとかじゃなくて？

動揺してしまいました。私が心配してくれた藤井先輩のためにもいちおう話をそらせてみようと思います。

「それより、今日も眼鏡じゃないんだね？」

「ああ、メイド服取りに行ったときに回収した使い捨てコンタクトレンズの使用期限がもうすぐだったから」

「それって昨日の彼と関係あるのかなー？」

「R18指定の話を昼休みにする趣味はないよ？そういうえば昨日の私は梶川家にお泊りしたことになってるのであとはよろしくね。で、さっきの遅刻は藤井先輩のお友達と関係あるのかなー？」

異常にうまい声マネに打ちのめされました。

そして言葉の内容から友美ちゃんには敵わないことを悟りました。いろんな意味で。

「なんで藤井先輩のお友達って分かったの？」

「運動会のパレード前に、藤井先輩の隣で髪も肌もやや色素の薄いハーフ顔の3年女子がものすごい形相で大会実行本部付近を睨んでるのを見たから？ちなみにそのとき大会実行本部では伊藤先輩が机に突っ伏した愛ちゃんの頭を撫でまわしてました」

「はー…」

返す言葉もございません。

「…ということがあったんだー」

まるっとげるはきました。

「でも愛ちゃんってまだ伊藤先輩に告白もされてないよね？」

それまで黙っていた有里ちゃんが言った。

「とぼつちりも甚だしいと思うんだけど」

めずらしくお怒りです。

「たしかにいろんな判断材料が足りないとは思っけど、それでも伊藤先輩じゃなく愛ちゃんに手をあげるなんてひどいわ」
美幸ちゃんも眉をしかめてます。

「ま、女の怒りの対象は女ってことで」

にやり、と不敵に笑う友美ちゃんもやっぱりどこか怒った様子です。

…なんか、不謹慎にも嬉しくなってしまった。

ああ、みんなは私のことで怒ったりしてくれるんだなあ、って。

すごく、心があたたかくなった。

「…愛ちゃんのネジがはずれた」

「うわ、なんで？」

「笑う要素はなかったはずだよ？」

「友達がいって良かったなああって思って」

言葉にしたらなんか安っぽくてあわてて手で口をふさいだけど、みんなは優しく笑ってくれた。

友達がいって良かった。

27. どうする梶川愛？

「…ところでさっき言ってた友美ちゃんの彼ってどういうこと？」

「ぜんっぜん話が分からなかったんですけど？」

美幸ちゃんと有里ちゃんが友美ちゃんに詰め寄った。

そっぴいえば、友美ちゃんがメールを送ったこと2人は知らなかったんだっけ。

にやり。

「友美ちゃんが運動会の帰り際に私の携帯から元カレに明日会いに行くってメールしたんだよ」

「…黒梶川愛」

ちっ、と舌打ちした友美ちゃんが目を暗く輝かせて邪眼ビームを出しそうになったところで昼休み終了5分前の予鈴がなった。

えっと、友美ちゃん魔族とかじゃないよね？

「さて美幸ちゃん、私たちとうぶん話題には困らないみたいだね？」

「そっね有里ちゃん、明日のお昼休みが待ちきれないわね？」

いそいそとお弁当箱を片付ける2人の肩や背中には、100人乗ってもダイジョウブっ！と物置のコマーシャルばりに手を振るちっちやいおじさんたちが見えました。

みんなファンタジーだなあ。

…とのんきな気持ちのまま放課後の創己会室に行くと藤井先輩が泣いててびっくりした。

なんか高校生になってからびっくりすることがやたら多い。

バレエ時代と生活が全然違うからかな？

バレエやってたときは、はたから見たらハデハデしい毎日を送っているように思われがちだったけど、運営上必ずある種の流れというかローテーションがあつてそんなにびっくりするようなことつてなかった。

本番直前の1週間で毎日振り付けやら立ち位置やらが変わることはあつても、そんなの予定調和みたいなもので。

良い公演にするっていうのが最重要課題で、個人という存在があまり価値をもたない世界だったから、センターも群舞もただのパーツだった。

「梶川さん」

わざわざみんなの注意を向けるように声を出した中井先輩の表情に、どこことなく友美ちゃんに似たところがあつてちよつと励まされた気持ちになつた。

世の中はバレエとは違つ。

みんなこれでもかとひとりひとりでびっくりする。

正解が分からないまま自分の行動を決めてその責任を負わなければならない。

不安だし、怖い。

でも喜びもある。

なんとなくな充実感もあるかもしれない。

「梶川……」

伊藤先輩が私の苦手なお怒りスイッチを押されているらしいのを見てちよつとくじけそうになつた。

いま、うまくすれば私はこの創己会室の中に漂う気まずい空気をな

んとかできるかもしれない。
でもひょっとしたらそれは間違いで、いますぐまわれ右してなかったことにするのが1番正解に近いのかもしれない。

よく考えよう。

しずかにすばやく考えてみよう。

…あんまりなんにも思いつかん。

さあ、どうする？

28。あれ？

放課後の創己会室に伊藤先輩と三井先輩と中井先輩と藤井先輩と私。そこまではいつもと同じですが、藤井先輩が泣いています。非常事態です。

私は今日の午前中に藤井先輩のお友達にビンタされました。伊藤先輩関係のトラブルです。

でも藤井先輩が泣かなくてはいけないようなことではなかったはず。です。

そのトラブルのもとになった伊藤先輩はなんかものすごく怒ってます。

いるだけで怖い、というのはいまの伊藤先輩のためにある言葉です。藤井先輩が泣いた原因はこの人のせいな気がします。

あれ？

私がビンタされたのもこの人のせいだったよねー？

ところで三井先輩は、私もうお手上げー、みたいなカンジでこちらを見ています。

さらに中井先輩は、友美ちゃんがめんどくさい仕事を人に押し付けるときにみせる顔でこちらを見ています。

つまり、私がこの場をどうにかしないといけないみたいです。

あれ？

なんかこれおかしいよねー？

なるべくKYなカンジで顔の横に右手をあげました。

「伊藤先輩に質問してイイですか？」

この結果次第でどうするか決めよう。

「伊藤先輩はどうして藤井先輩を泣かせてるんですか？」

お前がナニ言ってるの？みたいな顔した中井先輩の反応で確信した。やっぱりビンタ事件が原因みたいです。

私の中ではもう終わった話だったんですけど？

一切責める口調にならないように、むしろ無邪気に聞こえるように全神経を集中した。

イラついてることに気づかれると事態を悪化させることになりそうだし。

「私は、伊藤先輩とのことでヒナコ先輩に頬を叩かれて痛かったし傷つきました」

うつ…、と伊藤先輩が怯んだのを確認してから言葉を続けた。

「だけど、藤井先輩は彼女の友達なのに叩かれた私を心配してくれたい謝ってもくれて嬉しかったんですよ？」

そのむかし、お前の言ってることはいちいち正しくてムカツク、と私に言ったのは誰だっけ？

「伊藤先輩のしていることは良くないことだと思いますよ？」

私の記憶が確かならば、小学生だったあなたの弟の伊藤翔太が私にこてんぱんにやっつけられた後で言ったセリフです。

「ごめん…」

伊藤先輩の口から出てきた言葉に、私以外の全員がびっくりして伊藤先輩を見つめた。
見つめられた伊藤先輩は手で口を覆って赤くなった。

「それは私に言ったんですか？藤井先輩に言ったんですか？」
お前まだ言うか？！みたいな顔で中井先輩がこちらを見えています。
気にしませんけど。

「藤井も、梶川も、ごめん……」
小さな声で、でもはつきりと謝ってくれて嬉しかった。

伊藤先輩は好きでいてイイ人です。
良かった！。
ちょっと嫌いになっちゃうかと思ったよ！。

「謝ってくれて嬉しいです。私は伊藤先輩が大好きです」
私の口から出てきた言葉に、私以外の全員がぴきーんと固まった。

……？

あれ？

なんかビミョーな空気が流れちゃったよ。
これって告白したことになるのかなー？

29。ダメ人間かもしれない

あれ？

いま私うつかり伊藤先輩に告白したことになるのかな？

固まってる先輩たちを見てそう思った。

たしかに伊藤先輩に大好きって言ったねワタシ。

違うところに神経を使ってたからつい口が滑っちゃったわー。

でも大好きって恋愛に限らず幅広い用途がある言葉だよなー？

実際そういうつもりで言ったわけじゃないしー。

「どうかしましたか？」

KYスキル炸裂でなかったことにしてみました。

まじで?!みたいな顔した中井先輩でしたが、さすがは友美ちゃんのお兄さんです。立ち直りが誰より早かったですから。

「いや、どうもしない。それより仕事しよう」

うん、仕事しよう。と三井先輩と藤井先輩が続いて席に着いたので、私も席に着いた。

「じゃ、運動会運営について各委員会と先生から寄せられた要望と感想をまとめたら今日の創己会は終了になります。…和也、お前も座れ」

ひとり固まったまま取り残されていた伊藤先輩を中井先輩が座らせたらなんか元通りになった。

たぶんね、叩かれるくらいだからまだ私の順番じゃないと思うのよ？
そこに無理矢理割り込んでダメでしょ？

もうすぐ中間テストも始まるっていつのに修羅場とかないわー、と
か思ったりもするし。

あざとい。

うん。

我ながらあざといと思います。

でもしょうがないじゃん。

学生の本分は勉強です。

「1番の課題はファイナーレのパレードで出る廃棄物の処理について
だな。昨年課題にされた重量についてはクリアしたけど、今度は分
別だってよ。再生可能な資源、ゴミまでそのまま可燃ゴミとしてゴミ
処理施設に持ち込んでいることに対して自治体からクレームがきた
そつだ。：俺たちが問題点を洗い出して、後期創己会が対策案を出
して、来年度前期創己会がガイドラインを配布、かな？というわけ
だから梶川さんしつかりね」

へ？

「愛ちゃんは1年間だけど、私たちは前期で創己会退任だから、後
期からは2年生が創己会を運営していくことになるでしょ？」

三井先輩の説明に納得はした。

先輩たち受験生だもんね。

でも心細くなってしまったのはどうしよう。

高校に入学してすぐ創己会に所属することになったときには創己会

を仕事というか義務みたいなものだろうと考えてたからそんなこと
思わなかったけど、思いのほか居心地良く時間を過ごしたせいかた
った2ヶ月ほどでダメ人間になっただけらしい。

想像しただけで心細くて泣ける。

「うわ、愛ちゃんが泣き出した」

「ああ、愛ちゃん泣かないで。伊藤君、お菓子あげてお菓子」
あわあわと三井先輩と藤井先輩になぐさめてもらってようやく泣き
止みました。

「すいません」

謝ったら噛んだ。

もう今日はしゃべるのをやめよう。

30。あざといのはじつち?

「うちの兄貴によると、結局のところ橋田雛子はストーカー体質なんじゃないかって」

…。

「橋田先輩はバツチリ付き合ってる気でしたみたいだけど、伊藤先輩はそういうつもりはなかったみたいだし、はたから見ているうちの兄貴や藤井先輩もどう扱ったら良いか分からなかったんだって」

「でも普通そんな誤解ってあるかしら？」
美幸ちゃんもつともなことを言った。

「だよねー？でもそれをツッコむと橋田先輩は精神がイタい人なんじゃないかってことになりそうで、あえてパンドラの箱を開ける人はいなかったらしい」

「でも実際にイタい人なの？」
有里ちゃんが納得しかねるように聞いた。

「たぶんねー。いちおう昨年度の終わりに伊藤先輩はその気がないことを伝えたらしいんだけど、受験勉強だつてあるんだし、みたいなことを言ったら橋田先輩のなかで、受験が終わるまでは待つてて、という変換をされたらしいわ」

饒舌な友美ちゃんの顔に、自己保身、と毛筆で書かれているのがはつきりと読めます。

「ちなみに伊藤先輩が藤井先輩を泣かせたのは不可抗力だつて。なにせほら、伊藤先輩ってパワハラスイッチ入ると存在自体が凶器になるから？」

話のイニシアチブを持ちつつ昼休みの残り時間を計算しているのが

手にとるように分かります。

「橋田先輩も男絡みじゃないところではいたってフツー、というかなんかうまく話のつじつまを合わせてくる人らしくて、ちょっと違和感を感じることがあってもこっちが勘繰りすぎなのかな？って思わされちゃうんだってー」

うまくいかなかったらなぐさめてよ、と元カレに会いに行く前に言っていたときには、聞かなくても後で話してくれるんだろうなー、って軽く考えてたんだけど？

「愛ちゃんさつきからずっと黙ってるね？」

「んー、そう？」

R18指定がどうのこつのはたぶんこちらを怯ませるための飛び道具みたいなモノだろう。

肉体行為について具体的な解説をお願いしているわけではないし。

「実は友達付き合いの経験が足りないもんで、どこまでプライベートに踏み込んで良いか迷ってる。男女間の付き合いの経験も足りないせいかヘタこいて痛い思いしたばかりだし」

「愛ちゃんが怖い…」

うるうると友美ちゃんがカワイイ顔をしました。

その背後に、邪悪スキル発動、とさえ書かれてなかったらそうとうなカワイイさだったと思います。

「いや、ホントに。友美ちゃんは大事な友達だから、あからさまに話そらされると地味にツライしどうしようかと」

「…黒梶川愛」

ちっ、と邪悪に舌打ちした友美ちゃんが私には1番カワイくみえる
んだけどなぜかしら？

昼休み終了5分前の予鈴が鳴って残念でしたが。

「週末に梶川家に泊めてくれるならその時に話します」
脱力した友美ちゃんの言葉に頬がゆるんだ。
今週末が楽しみです。

31. ダメな娘

週末。

今日は梶川家でお泊り会です。

「…梶川家は庶民って言うてなかったっけ？」
みんなの言いたいことはわかるよ？
梶川家の住まいについてよね？」

うちは母方の曾祖母の生家に住んでいるんだけど、大きな日本庭園と大正ロマン漂う年代物の外観はそのままに、全館床暖房完備などの近代リフォームがばっちり施された快適な住まいとなっておりません。

…が、残念なことこの家は梶川家の持ち家ではない。
実は母方のおじいちゃん名義の空家に居候させていただけ
で、リフォームから固定資産税までおじいちゃんの管轄なので
うちはノータッチ。

というわけでうちのお母さんはなかなかすごい箱入りお嬢様だったんですが、梶川家は間違いなくいちサラリーマンが家計を支える庶民の家なのデス。
家賃とかないし、バレエをやめて出費も減ったけど、それでも貯金とかあんまりなさそうだし私立大学とかキツイだろうなー、って思うくらいに庶民だよ？

「梶川ママが箱入りお嬢様っていうのはすっごく納得できるわー」
有里ちゃんが遠い目をして言った。

「家庭料理で羊を食べるなんて普通ありえないし」

…ホントはあの料理、おじいちゃんの家のお手伝いさんが用意した

んだよ、って言ったらさらに誤解されそうだったから黙っておいた。
お母さんの名譽のために言うと、梶川家の食事はきちんと毎日お母さんが作っている。

ちゃんと美味しいごくフツの家庭料理。

今日みんながくるのも楽しみにしてて、なに作るっかなー、っておとといから言ってたくらいだったんだけど。

おじいちゃんとの電話でその話をしたら、愛の友達におかしな食事をさせるわけにいかないって押し切られたそう。

なんでもむかしうちのお母さんがお父さんとの結婚の了承を得ようと、主婦としてやっていけることをアピールするために作った料理が殺人的なマズさだったそうで…。

ただお父さんがその料理を完食したことで結婚の了承をもらえたという…。

いったいどんな料理だったんだろうね？

とにかく、おじいちゃんの認識ではお母さんの料理は危険とされているので、よそからお預かりした大事なお子様たちに食べさせるわけにはいかないそう。

たぶん料理だけじゃなくて、お母さんのことをいつまでたっても人前以下のどうしようもないお嬢様として見ているんだと思う。

過保護なんだよね。

ホントはそんな心配必要のないのに、とお母さんに言ったら、ダメな娘でいるのも親孝行のうちよ、とウインクされた。

そんなもんかなあ？

…よく分かんないや。

それよりいまは友美ちゃんの話をしようぜ。

そのためのお泊り会よ？

と見つめたら、友美ちゃんはへにゃあ、と眉を下げた。

「それが、なにがあったか記憶がないし、どうなったのかもよくわからん」

32。困ったヒト

「それが、なにがあつたか記憶がないし、どうなったのかもよくわからん」

…？

「それは、元カレとの再会に舞い上がっちゃってとかそういうこと？」

有里ちゃんが聞いた。

「いや、違う。えーとねー、最初から話すから、なるべく説教とツッコミは無しで聞いて？」

友美ちゃんが語った内容はこんなカンジ。

友美ちゃんの元カレは28歳のウェブデザイナー。

彼とは昨年の夏休みに図書館で知り合った。

何回か顔を合わせているうちに彼を好きになった。

友美ちゃんは彼と仲良くなることに成功した。

さらに仲良くなりたかった友美ちゃんは彼に友美ちゃんは18歳だと思わせることに成功した。

友美ちゃんは彼氏彼女な関係になることに成功した。

ちなみに、成功した、という点につきましては、友美ちゃんの全力投球のあざとい賭けが成功した、という意味合いを含んでおります。

しかし11月に、夏休みの課題だった読書感想文が友美ちゃんの顔写真入りで新聞に掲載されたことで中学3年生であることがばれた。問い詰められた際に彼の地雷を踏みまくった友美ちゃんは「もうお前のことは信用できない」と着信拒否指定にされた。

部屋の合鍵については思いつかなかったのかなんなのか取り上げられなかったものの、その後顔を合わせることはなかった。先日まで。

友美ちゃんはまだ子供だから会いに行ける時間にも限りがあるし、会わないようにするのは簡単だったみたい。

だから会いに行ったときは一晩中でも待つつもりで、梶川家に泊まるって嘘をしておいたんだって。

…で、会いに行ったけど彼は予想通りなかなか帰ってはこないし、お腹の空いた友美ちゃんが冷蔵庫を開けると大人女子が飲みそうな甘いお酒がいっぱい入ってるし、なにこれムカツク、とひとりで酒盛りをはじめ、さらに2度ほどリバースしながらも飲みつづけ、気がついたら朝で、彼と仲良くベッドの中で、しかも避妊しなかった形跡があったらしい。

。。。
避妊しなかった形跡ってナニ？
いや、それどころじゃない。

思わず友美ちゃんの腹部を凝視しました。

「まさか…」

「いや、たぶん大丈夫」

「なんでそんなこと分かるのさ？」

「えーとねー、オギノ式？」

「なにそれ？」

「たぶん保健体育の教科書に載ってるよ」

「友美ちゃん、彼になにひとつ確認してないんでしょっ？」
「あきれたように美幸ちゃんが言った。」

「たぶんそれが間違いなよ」

冷静に結論を出した美幸ちゃんはすごいです。

さすが男女交際経験者です。

私と有里ちゃんなんて、ツッコミどころ満載のオトナな話にアワアワでした。

でも美幸ちゃんに言われて気づきましたが、たぶん友美ちゃんはいろいろ確認すべきことをほったらかしにしてきたようです。

友美ちゃん自身にツッコまれたくない部分があったからでしょうか。たぶんそれはずっと前から。

私のこと好きですか？

私たち付き合っているんですか？

私たち別れないといけないんですか？

ずっと一緒にいて良いですか？

たくさんのことをほったらかしにしてきたツケがまわってきてるのに、この期に及んでさらにほったらかしな友美ちゃん。困ったヒトです。

でもなぜでしょう？

ちよっと自分を見ているような気持ちになります。

33. 苦手な人種

私には苦手な人が何人かいる。

なかには、できればかわりあいになりたくないな、と思う人もいる。

「細川のお姉さんがね、愛に明日の午後から遊びにこないかっていうんだけど」

お母さんが言った。

細川のお姉さんは、私が最も苦手でもかかわりあいになりたくない人だ。

しかも、いまは中間テストの真っ最中。

「愛はテスト期間中なんですけど……」

お母さんを困らせたくはないけど、行きたくないなので断る口実を言ってみた。

細川はお母さんの旧姓だ。

そして細川のお姉さんというのはお母さんの一番上のお兄さんの奥さんのことだ。

私が小学2年生だったときのお正月、細川家で、おじいちゃんがお年玉をくれながら「愛はすっかり可愛くなったな」と言ってくれた。

私は「えー、そんなことはありません」と答えた。

実際、ガリガリに痩せた私はお世辞にも可愛くはなかったと思う。

そんなことがあった後のお使いで台所にお酒のおかわりをもらいに行くとき、細川のお姉さんに「誰も本気であなたを可愛いと思っていないわけではないのだから、わざわざ否定せずにありがとございませ」と話を合わせておきなさい」と言われた。

びっくりした。
そりゃそうだろ。

嫌われてる、と思った。

ところが、私がバレエでセンターをやるようになると、手の平をかえしたようにあたりが良くなった。

正直、うわ、気持ち悪い、と思った。

そしてバレエをやめると、無言で距離を置かれるようになった。

この人のこと苦手、と思った。

さらに今年の4月、高校に首席入学したことが分かると、「愛ちゃんならやれると思ってたわ」とやたら高そうな腕時計をプレゼントされた。

否定せずに、「ありがとうございます」と話を合わせておいた。

どう考えても、会いに行きたい人ではない。

しかしお母さんは引き下がらなかった。

「竜一君がお見合いしに帰ってくるんだって」

「…」

それ私に関係ないじゃん。

竜一さんは細川のお姉さんの第1子ご長男様だ。

背が高く足が長くて、やたら目つきが鋭いインテリヤクザな見た目をしていた。

ただし、最後にあつたのがもう5年ほど前なのでいまはどうなっているか分からない。

なにせ竜一さんはいま32歳になっているはずだ。

ハゲはじめているかもしれないし、腹が出ているかもしれない。

「細川のお姉さんは、愛と竜一君は気が合うみたいだからぜひ会いにきてくれって」

気が合うって、最後に会ったとき私は10歳で竜一さんは27歳だったんですけど？

もし気が合うとしたら、たぶん細川のお姉さんとかかわりあいになりたくないと思っっているという一点のみです。

竜一さんははつきりと細川のお姉さんを嫌っていた。

しかし細川のお姉さんは竜一さんとの不都合についてはスーパースキルを発動していて自分ではいっさい向きあわない。

今回は見合いをして頂くために、私に竜一さんのご機嫌取りをさせるつもりなんだろう。

いつのまにか私は細川のお姉さんの手駒認定を受けたらしい。

それにしたって私はテスト期間中なんですけど。

あまりに理不尽でなんかどうでもよくなってきた。

「…行きます」

お母さんが行けと言っなら。

本当は竜一さんのことも苦手なんだけどなー、と思っつて憂鬱になつた。

34. ドナドナ

今日はこれから細川家に行かなくてはいけない。

いやすぎる。

ぶっちゃけ私は細川家の人がほぼ全員苦手なのです。

苦手すぎてテスト期間中にもかかわらず行きたくないと思えなくらいに苦手です。

…癒されたい。

ダメもとで放課後の創己会室に行ったら、伊藤先輩がいた。

私を見て微笑んだ伊藤先輩に思わずソッコー抱きつきたい衝動にかけられました。

「めずらしいな。テスト期間中に顔見せるなんて」

そう、いままでテスト期間中といえば、煩惱をなくして集中するため、さらには勝手な願掛けのため、伊藤先輩たちをしていたワタシ。徹底的に伊藤先輩を避けてきました。

てか、めずらしい、てことは避けてたことに気付かれてたのか…。なんとなくゴメンなさいだわー。

勝手に避けたり、探してまで会いにきたり、本当に申し訳ない。

でも今日の私には伊藤先輩の癒しがどうしても必要なのです。

「伊藤先輩に会いたくなっちゃったんです」

さっきまで机に腰掛けるようにして参考書を眺めていたらしい伊藤先輩が、ぴくつと一瞬動きを止めて私を見つめました。怪訝そうな、心配そうな、あとなんか分からないカンジの表情も混ざってますが、おおむね私を甘やかしてくれそうな気配が濃厚な顔つきなのでよしとします。

いま私は、伊藤先輩に抱きついてすりすりしたり匂いをふんふんかいだりして癒されたいのです。

伊藤先輩の持っていた英語の参考書をそっと取り上げ、カバーの折り返しを栞がわりに挟み込んで閉じて机におきました。

…。

はあー、超癒されるわー。

程よく固く柔らかく引き締まった筋肉に、なにかお日様のような匂いがします。

衣更えが終わった後で良かったー。

白シャツ越しに感じる伊藤先輩はカクベツですなー。

これにくらべたら学ラン越しとかイマイチそうだよねー。

ああ、もうずーっとこのままでいたいな。

細川家とか行きたくない。

「なんかあつたのか？」

ぼん、と頭の上に伊藤先輩の手がのっかった。

さっきまで空中でワキワキと所在なげに手を浮かせてたのも癒しポ

イントだったのに残念です。
いや、でもこれはこれで癒されるかも。
手の重みとあたたかさがあると心地良い。

しかし無情にも鞆の中の携帯電話が鳴りだしました。

ドナドナドーナドーナー。

着メロをドナドナにした覚えはないんですが、今日この時、私の耳にははつきりドナドナが聞こえます。

気分は子牛さんです。
できれば無視したい。

伊藤先輩の胸に耳を押し当てて心臓の音に集中してみることにはします。

さつきから、伊藤先輩の心臓がびっくりするぐらい激しく鼓動しているのどうまくいくかなー、と思ったんです。
でも耳って右と左にあるんだよねー。

しかも今回ものすごくしつこく鳴ってる。

3度目の無視は許されならしい。

…ちっ。

しかたないので電話に出ることにしました。

「…はい」

「悪いけど、これが終わればお盆まで大丈夫だと思っからおとなしく帰ってきてちょうだい」

「…はい」

かしこまりましたお母様。

「伊藤先輩、なにも聞かずにカンバレって言うってもらってイイですか？あと、できれば、お前ならできる、とかもお願ひします」「伊藤先輩は、優しく頭を撫でながら、「無理するな」と言った。過去に誰からも聞いたことがないくらいに優しい声で。

…。

それは反則です。

35. 仕事しごとシゴト

細川家に着いて開口1番に「愛ちゃん空港まで竜一を迎えに行つてちょうだい」といわれた。

玄関で。

靴脱ぐ前で良かったつて思うとか終わつてる。

でもこれが細川家。

これが細川のお姉さん。

「行きます」

すでに駐車場にタクシーがきているのは知っていた。

挨拶だけすませたら細川のお姉さんが迎えに行くのかなー、とか甘いこと考えてた自分に気合いを入れ直した。

細川のお姉さんは車を2台も持っている。

タクシーは最初から私に竜一さんを迎えに行かせるつもりで呼んであつたんだろう。

しつかりしろワタシ。

今日は仕事にきたと思つべきだ。

空港に着いたはいいけど、竜一さんの顔を見分ける自信がない。

たぶん竜一さんだつて私のことが分からないだろう。

なにせ5年ぶりですから。

しかも5年前だつてさほど仲良しだつたわけじゃない。

17才も年が違つんだからあたりまえだ。

今回、竜一さんのご機嫌取りに私が呼ばれたのは、細川のお姉さんのブラックリストに載つていない使い勝手の良いイトコで竜一さんに嫌われていないのが私くらいだつたんだと思う。

むかしから、細川のお姉さんの神経を逆なでするように、竜一さんが仲良くするイトコはみんな細川のお姉さんのブラックリストの常連ばかりだった。

おかげで八つ当たりの流れ弾が小学生の私にまでバンバン命中してました。

…。

やばい帰りたくなってきた。

と、到着ゲートから竜一さんが出てきた。

確信を持って言えたのは、やっぱり血が繋がっているからだろうか？

しかし格好良くなって驚いた。

若く見えるわけでも老けて見えるわけでもなく、32歳として最高にハイクオリティなインテリヤクザになってました。

大人になると、服装や髪型や立ち居振る舞いがものすごくポイントになるんだね…。

美男子ではないけど、狙われたらどんなお姉ちゃんもあつという間にメロメロになりそうなカンジで男の色気がだだもれになっています。

お見合いとか絶対必要ないわー。

結婚できないんじゃないじゃなくてしたくないだけだろうこのヒト。

その気がないならいっそ帰ってこないでよー、と思いながら声をかけに行った。

竜一さんは、迎えにきたのが私だと分かると、ちょっと面白そうに片方の眉をあげた。

あとは、竜一さんのご機嫌を取りつつ、かつ、細川のお姉さんの地雷を踏まないように、細心の注意を払って態度を使い分けた。

とくに、竜一さんの下ネタに相槌をうつタイミングには気をつかいました。

たぶん細川のお姉さんに嫌がらせしてるんだろうけど、ちよいちよ
い下ネタ投下するんだよねー。

細川のお姉さんは相変わらずのスーパースルーだけど、私までスルー
するとご機嫌取りにならないし。

かといって巻き込み事故とかまっぴらゴメンだし。

だから例えば細川のお姉さんがお見合い写真を前に相手のことを褒め
めちぎっている最中、竜一さんが「でも足開いたら女はみんな同じ
だけど」と呟いてもいったん聞こえないふりでスルーして、細川の
お姉さんがトイレに行った際に「先程のご意見、ある意味見事な博
愛精神です」と返しておくとか。

「お前できる女になったな」とご機嫌の竜一さんのせいで細川家に
泊まらされたのは散々だったけど、お母さんの顔は潰さずにすんだ
と思う。

ものすごい疲れたー。

36. 遺伝子の不思議

細川家で神経を擦り減らした甲斐があったのかなかったのか、竜一さんが梶川家経由で学校まで送ってくれることになった。

ありがた迷惑かもって思っちゃうけどね！。

だって2人きりで細川のお姉さんの車に乗っているとときにタバコを吸うとかやめてほしいわ！。

おきにいりのプジョーにタバコの臭いがついたら私までとばっちりをうけそう、というより理不尽に私のせいにされそう。

なにせ細川のお姉さんは竜一さんの不都合についてはスーパーズルーなのだ。

文句を言わないかわりに窓を全開にしたら、すぐに閉められたうえにチャイルドロックをかけられた。

おまけに、にやにやしながらタバコの煙を吹きかけられた。帰りに事故れ、と念じておきました。

「お前ずいぶん雰囲気が変わったな」

「そうですね？」

「ああ。ずいぶんオンナくさくなった。男でもできたか？」

「できてません。15歳になっただけです」

「そうか」

男、といわれた瞬間に伊藤先輩を思い出してあいたくなくなった。

昨日会ったばかりで、今日もたぶん会えるって分かっているのに、あいたくなくなった。

「…お前やつぱり男いるだろう？」

「いませんよ。あ、次の交差点を左に曲がって下さい」

「学校は右じゃないのか？」

「良いから良いから。曲がったら次の信号も左でお願いします」

「…」

「あとはしばらく直進です」

竜一さんはもう何も言わなかった。

クセのある人ではあるけど、イヤな人ではなかった。

これまで5年間も顔を合わせなかったくらいだから、もう当分会うこともないだろうけど。

「あ！車とめて下さい。はやくはやく」

ターゲットロックオン

「あとは歩いて行きます。ありがとうございます。お見合い頑張ってください。それでは失礼します」

ダッシュで行かせていただきました。

伊藤先輩のところまで。

私に気づいて微笑んだのを見てテンションが上がった。

私ったら伊藤先輩が好きなんだわー、と自覚してドキドキした。

「伊藤先輩おはようございます！」

「おはよう。元気そうだな」

頭を撫でられてさらにテンションが上がった。

うわ、なんか萌えつとしたー。

朝から仲良く一瞬に登校とか少女マンガちつく。

「おい」

…。

竜一さんまだいたんですね。

「もう帰って良かったんですねよ？」

「…」

「まだなにかあります？」

「…」

「笑いすぎです」

「お前、男いないって言った直後に男めがけてダッシュしたな」

「それがなにか？」

「いや、もう良いわ。ひさびさにウケた」

「お見合い相手もおもしろいとイイですねー」

「そうだな」

にやり、と悪い顔で笑って去っていかれました。

ちよっと鏡を見ている気分になりました。

やっぱり血が繋がってるからかなー？

37. 負けてもイイ(前書き)

あけましておめでとういっしょに暮らそう。

37. 負けてもイイ

竜一さんは、にやり、と悪い顔で笑って去って行った。

私は、車が見えなくなるまで手を振って見送った。
接待終了。

疲れたけどなんとなく充実感。

…あれ？

伊藤先輩が何を考えてるのかよくわからないビミョーな顔をして立っている。

「…いまの誰？」

「…え？」

なんかのスイッチを押しかけてるんだけど押しでないみたいなのでもなんのスイッチ？

「誰？」

「イトコです」

ホントのことなのになぜかインチキくさく思われたっぽい。

伊藤先輩は眉間にシワをよせた。

なんなんだこの展開？

さっきまで少女マンガちつくで楽しかったのに。

「伊藤先輩？」

「…」

なんなんだこのモヤッとしたカンジ。

伊藤先輩は、ふう、と息を吐くと「なんでもない」と少し笑った。

いや、なんでもあるだろうそれ。

「試験に集中しないとな」

それは確かにそうです。

でも、ワタシの本能がなんかしとけって騒いでマス。

これスルーしちゃダメっていつてます。

「伊藤先輩？」

「なに？」

「さっきのインテリヤクザは私の母方のイトコです。彼は今日これからお見合いで、私は彼に機嫌良く見合いして頂くために昨日からテスト勉強もしないで一生懸命ご機嫌取ってました。おかげでテストどころでなく疲れしました。本当にものすごくものすごく疲れしました。だからがんばったご褒美クダサイ」

「…なにが欲しい？」

「伊藤先輩」

即答です。

「…」

「…」

「…学校行くか」

無視された！
がびーん！

すたすたと何事もなかったように歩き出した伊藤先輩。
敗北感を感じマス。

「梶川」

「…はい」

「おいで」

ハンサムに笑わないでクダサイ。

「ほら」

手を繋ぐように差し出された手を引っ込められたくなくて急いで追いついた。

…今日は伊藤先輩が手を繋いでくれただけでガマンしよう。

「金曜で試験終わるし、週末遊びに行くか？」

「行きます」

即答です。

伊藤先輩は満足気につむつむしています。

敗北感を感じマス。

でもちよっとキュンとしています。

…テストがんばろう。

38。どゆこと…？

づかれたー。

自分の部屋に入った途端、疲れが怒涛の勢いで襲ってきました。

テスト期間中にもかかわらず親戚のおばさんに呼び出され、泊まりがけで17才も年上のイトコのご機嫌取りをやらされ、教科書を見直す余裕もなく微分積分と物理のテストを受けました。

…もう寝よう。

まだ昼ご飯も食べてないけど、それでも朝まで寝てられる自信があります。

…お休みなさい。

ぐー。

…。

…。

…。

なんでこの人が私の家で朝ごはん食べてるんだ？

「…おはようございます」

いちおう挨拶してみました。

竜一さんはお味噌汁を飲みながら箸を持った手を挙げて、ん、と返事した。

「美津子さんごちそうさま」

「いいえー、おそまつさまでした。はい、コーヒーどうぞー」

「ありがとうございます」

お母さんから受け取ったコーヒーをひとくち飲んで新聞を読みはじめる。

ダメージ加工されたグレーの古着風ヘンリーシャツのボタンを外して、ほとんど黒に見える緑色の細身のパンツを合わせ、黒縁の眼鏡をかけて日経新聞をチェックする32歳のインテリヤクザ。細川家の人でなければ目の保養だったのに残念だ。

「眼鏡いくつ持ってるんですか？」

昨日は銀縁だった。

「3つかな？」

新聞から目を外さないで答えるときの目つきが細川のおじさんを彷彿とさせます。

血の繋がりがって不思議。

いや、それはいいから。

「うちのお父さんは？ていうかなんでここにいるんですか？」

そこお父さんの席ですよ？

そしていまは朝の6時ですよ？

「パパなら昨日から1週間出張よ？」

お母さんが自分のコーヒーと私の朝食を並べながら言った。

それはマズイ。

いつてらっしゃいのひとつも言わなかった。

…娘失格？
地味に打ち萎れました。

目の前ではお母さんと竜一さんが楽しそうに会話をしている。
まるで仲の良い姉と弟みたいに。
そりゃそうだ。

お母さんと竜一さんはおばと甥とはいえフオしか年が離れていない。
私なんかよりよっぽど仲が良いに決まっている。

だからご機嫌取りもホントはお母さんに頼めばイイのに。

私、ナメられてるんだろうなー。

「…でね、イイかな？」

お母さんが上目使いにこちらを見ている。

…？

ぜんぜん話聞いてなかったんだけど。

テーブルの下で竜一さんに足を蹴られたので空気を読んで聞き返さないことにした。

「もちろんイイよ？」

「ホントー！やったあ！じゃ、竜一君、悪いけど日曜日まで愛のこ
とよろしくね！」

「任せといてよ。美津子さんは安心して信二さんと楽しんできて」

…？

目の前ではしゃぐお母さんに気づかれないように、どゆことっ？と竜一さんに視線を送ると、にこやかな笑顔のまま、黙れ、と無言で伝えてこられたので黙っていた。

そのまま学校に行った。

そして学校から帰ってア然とした。

お母さんはお父さんの出張先に行ったそうです。

日曜日まで帰ってこないそうです。

それまで竜一さんと2人で過ごすそうです。

どゆこと...?!

39。しょせん身内ですケド

今日は木曜日。

お父さんは昨日から一週間の出張に行ったそうです。

さらに、今日お母さんがお父さんを追いかけて遊びに行ってしまったそうです。

お母さんは日曜日まで帰ってこないそうです。

それまで、私は竜一さんと過ごすそうです。

…どゆこと？

「お前ひとりっ子だろ？兄弟欲しいと思ったことないの？」

昼飯に注文した宅配ピザのフタを開けながら竜一さんが言った。

細川家は多産家系だ。

お母さんは5人兄弟の末っ子だし、そこまできなくてもイトコたちもみな3〜4人兄弟があたりまえ。

竜一さんは3人兄弟の1番上だ。

竜一さんからすると、ひとりっ子のイトコは私だけ。

…兄弟。

やたらお金と時間をとられるバレエをやっていたときには、ひとりっ子だから大丈夫なのかな？と安直に考えていたことがあった。

いまでは、むしろ私がバレエをやっていたせいでひとりっ子だったのかな？と思う。

バレエをやってなかったら兄弟がいたかもしれない、と思う。

だから、私が兄弟が欲しいとかいらんないとか言ったらいけない気がする。

「お母さんはもつと子供欲しかったかな…?」
むしろそっちのほうに気がなる。

たくさんの兄弟に囲まれて生まれ育って、ほかの兄弟は複数の子供を生き育てていて、なのに自分はたったひとりの子供にかかりつきりで…。

もしそうなら、申し訳ないことをしたな、と思う。

「お前過去形で言ってるけど、美津子さんは次の誕生日でやつと39歳だぞ。いまだき40歳過ぎて初産の人だっているんだから、いまからでも産もつと思えば産めるんだぜ」

「…」

「お前だってもう男つくるような年なんだし、親離れくらいできるだろ」

「…え?」

それって…。

「あ…、えつと、はい」

そういうことか。

「気持ちは分からないでもないけど、そういう微妙な顔を美津子さんと信二さんに見せるのはナシな」

「…善処シマス」

「よし」

「竜一さんはお仕事大丈夫なんですか?」

てつきり、お見合いだけしたら帰るんだと思ってたんだけど。

「ああ、ちよつとこつちでやることがあったから金曜日まで有休申請してあったんだ」

でもうちにいるのは私がひとりにならないようにってことだよな?

「ごちそうさまでした」

私が食べ終わるのを見届けると、竜一さんは、ん、と席を立った。

「じゃ、俺はこれ片付けたらちよっと用を済ませてくる。6時までには戻るから晩飯に食べたいモノ考えといて」

いま、わざわざ私が食べ終わるのを待ってくれてたのかな？

あれ？

竜一さんってデレなの？

店屋物ばかりもなんなので冷蔵庫の残り物で晩御飯を作ってみた。

「お前こんなことしないでよかったんだぞ？明日もう1日テストあるんだろ？」

「普段からテスト期間中はさほど勉強しないので大丈夫です」

軽く教科書を見直して、あとは早寝早起きでコンディションを整えるくらい。

そのほうが集中できる気がするし。

「そうか。じゃあ後片付けは俺がやるから、お前はさっさと風呂入って寝なさい」

大きな手で頭をポンポンされた。

「作ってくれてありがとな」

うわ。

竜一さんは絶対デレだ。

デレなインテリヤクザ。

細川家の人でなかったらかなりツボなのに残念です。

40. うーちゃん

朝からベーグルサンド食べちゃうなんて都会人だわー。

はさまれたレタスがしゃきしゃきで超おいしいんですけどー。

でも24時間営業のベーグルサンドショップとかここらにあったっけ？

「このベーグルサンドものすごくおいしいですねー」

「そうかそうか」

「なんていうショップですか？ぜひまた食べたいです」

「ショップ名か…。強いて言うならリュウイチズショップ、…いや長いな、やっぱりリュウズショップかリュウズキッチンだな」

「手作りなの?!まじで?!竜一さん天才じゃね?!超絶美味だよ?!」

…あ、猫かぶるの忘れた。

「お前カワイイ女になったな」
満足気だ。

ありなのか。

竜一さんってもっと気位の高いタイプかと思ってたけど違うらしい。

いよいよもってデレ属性だな。

いかん。

ちよつと調子にのりたくなってきた。

「竜一さん、このカフェオレも美味しい데すが、もっと甘くしちゃつてイイですか?」

「なんだ。お前甘党か。気がつかなくて悪かったな。イイぞイイぞ、

自分が1番オイシイと思う食べ方で食べなさい。そして俺のことはこれから昔みたいにうーちゃんと呼びなさい」

うーちゃん。

たしかにむかし私は竜一さんのことをうーちゃんと呼んでましたね。みんなが竜ちゃんと呼んでいるのをうーちゃんだと勘違いしてたんです。

でもそれって幼稚園の時だし、高校生になって32歳をうーちゃん呼ばわりするのはちょっと抵抗があるんですけど…？

竜一さんはいそいそとキッチンからグラニュー糖を運んできた。

掻き混ぜスプーンとそれをのせるための小皿つき。

「うーちゃんありがとう」

…満足気だ。

ところで今日のうーちゃんは白いVネックTシャツとリーバイスに和風の小紋柄の入った黒色のシャツをはおってます。

眼鏡は昨日と同じ黒縁です。

そこそこ砕けた格好で社会人としてはオフの格好なんだろうけど、ばりばりのシヨップ店員に見えます。

うーちゃんオシャレだなー。

「うーちゃんがデートで女の子にして欲しい格好ってどんな服？」

「お前やっぱアイツと付き合ってるの？」

「付き合ってます。アタック中です」

「うわ。恥ずかしくなるようなこと言ったな。でもデートするのかわ？」

「週末に遊びに行く約束をしていただきました」

「…それはガッツリ落としにいきたいところだなー」

「うーちゃん相談にのってくれますか？」

「任せておきなさい。今日の午後は予定がない」

「うーちゃんありがとう」

「…」

満足気だ。

うーちゃんと思いがけず馴れ合ってしまった。

お母さんが喜びそうなので良しとしよう。

41. ブラックカード

「まずは美容院だな」

「髪は先月切ったばかりですケド？」

「でももつと短いほうが良いと思う」

「なんで？」

もともと身長160センチの少年体形なうえに女の子らしい顔立ちしていないのに髪短かったらダメでしょ。
切ってから後悔しても遅いんだよ？

「愛は髪短いほうがエロくなると思うから
まじで？」

いろいろツッコむところがあるはずだけど、いまの一言で髪切るう
と思っただけにまずツッコもうぜワタシ。

「切ります」

ああ、恋する乙女は欲が深いわー。

「でも髪切ったり洋服買ったりそんなにお金ない」

「出してやるよ」

実はそう言ってもらおう気マンマンでした。

私は庶民派高校生ですが、うーちゃんは細川建設グループの跡取り
息子です。

いまは細川建設とは無関係な建設会社にお勤めだそうですが、私よ
りはるかにお金持ちであろうことはテッパンです。

なので、イトコの恋のためにはばんばん使ってクダサイと思います。
にやり。

…。

… あらまあ。

鏡の中に知らない人がいます。

うーちゃんと美容師さんにすべておまかせした結果、耳から下に思いきりよく段を入れて中をすきまくったボブなのか長めのショートなのかよく分かりませんがそんなカンジに仕上がりました。

なんと、まつげパーマとまつげエクステもしちゃいました。
たぶん校則違反です。

しかし恋の前ではささいなことですが、それに絶妙な加減がされていてとっても自然。
きつとばれないと思う。

それでいて効果はバツグン。
美容師さんには、すぐ馴染んじゃって物足りなくなると思うより、
と言われましたが充分です。

なにより、自分で言うのもなんですが、すっごく素敵なんです。
ただ初めてだから2〜3週間しかもたないって言われて残念でした。

それから洋服を見に行きました。

「胸がないなら足を出せ」とのうーちゃんの言葉により、下はショートパンツとミニスカートを中心にすることにしました。
足を出せて…。

「あざと過ぎませんか？」

「胸のでかいおんなが胸をテーブルにのせるのはあざと過ぎて引くけど、足の綺麗な女が盛大に足を出すのは俺が許すから大丈夫」

うーちゃん足ふえちですか。

「それはうーちゃんの意見ですよね？」

「胸は男によつて好みがあるけど、綺麗な足はみんな大好きだぞ。

強いて言うならいつも出して欲しい派と自分の前だけ出して
欲しい派に分かれるくらいだ」

そういうものー？

「ごたごた言つてないで試着しないと日が暮れるぞ」

そだね。

洋服も完全にうーちゃんと店員さんまかせて選んでもらってますが、
試着は私がしないと似合うかどうか分かりませんから。

しかしうーちゃん選びすぎ。

親切な店員さんが裏から試着室の前にパイプハンガー持ってきたし。
ハリウッドセレブもびっくりです。

遠慮なくたかりますけどね。

うーちゃんブラックカード持ってたし。

ゴールドカードはもう古い、とのセレブ名言いただきました。

ごちそうさま

42. セレブ買い

試着室のドアを開けたら、うーちゃんが電話してた。

「だから、チーム名でコンペ出したらお前の企画にならないって言うてるの。女の企画じゃ通らないって、…それでも良い企画なんだから上に名前アピールするチャンスだと思えばイイじゃん。第一、チーム名で出して企画が通っても俺の手柄にしかならねえって。お前来年は総合職試験受けるんだろ？ならそろそろ名前売る努力しないとダメじゃん」

お仕事の電話なら邪魔しちゃダメだねー。

…あれ？

いつの間にか試着室の前のパイプハンガーが2つに増える。
1つはさつき着た服から買いにしたのをかけてあるみたい。

あ、値札ついてる。

試着室に持ってきたときには値札外してあったんだよねー。
と何気に裏返して固まりました。

タンクトップが九千円でナニコレ…。
いや、たしかにたかる気マンマンでしたよ。
でもね、でも…。

恐る恐るショートブーツの値札をチェックして青ざめた。
よんまんなせんえん…。

思わずそーっとブーツをディスプレイしてあった場所に戻そうとしたらお尻に蹴りいれられました。

うーちゃんひどい…。

無言でトップスを押し付けられました。

上だけ着替えてこいってことみたい。

でもさすがにこれ以上は…。

「もうイイよー」

充分です。

電話の邪魔にならないように小声で伝えたら、仕方ないな、と肩をすくめてくれたのでホッとした。

でもうーちゃんが持ってたトップスを買いのパイプハンガーにかけようとしたので焦った。

「うーちゃんダメ！」

…つい大きな声が出てしまった。

うーちゃんは、電話の相手に、ちょっと悪い、と声をかけると、肩に携帯のマイクを押し付けるようにしてから私に言った。

「…どうした？」

「…だって、こんなに買ってもらえないよ」

いくらたかる気マンマンでも、限度ってあるじゃん…。

「…遠慮してんの？」

どっちかというと、引いてんの、ですけどうなづくワタシ。

「馬鹿だな、愛を着飾るのは俺の特権みたいなもんなのに」

「とっけん？」

にやり、と笑いながらうーちゃんは続けた。

「そうだよ。親以外で愛にこんなことできるのは俺くらいだろ？」

うーちゃんは、くしゃり、と私の髪を優しく乱雑に撫でた。

「アタック中が彼氏になる前にしとこうと思ってな」

…悪い顔だ。

結局、それまでに選んであった服を全部試着してさらに4着を買うことになった。

ところでいったん中断していた電話を耳に当てたうーちゃんが、電話が切れることにあれ？ってなってたけど良かったんだらうか？うーちゃんは軽く、ま、いっか、なカンジだったけど。

その夜は買ってもらった服をきてレストランで食事した。

初デートの前にデートしてやったぜ、とわけの分からないツボで喜ぶうーちゃんでした。

43. できれば優しくしてクダサイ。

「そういえば週末のデートって土曜？日曜？」

「土曜です。日曜はお母さん帰ってくるし、うーちゃんも帰っちゃうんでしょ？」

「…お前イイヤつだな」

うーちゃんテレてますね。うぶぶ。

なんだか心がほんわりします。

おじいちゃん以外の細川家の人を身内として大切に思う日がくるなんて…。

寝る前に一緒にDVD見ながら他愛ないおしゃべり。

すっかり仲良しさんですねー。

「それにしてもデートってなににするのかなー？」

「高校生だろ？映画見たりゲーセン行ったり？」

「映画はともかく、ゲーセンにいる伊藤先輩って想像つかない…」

というか創己会室のイメージが強すぎてそもそも遊びに行く想像ができない。

「うーちゃんは女の子とのデートでなにしたい？」

「お前それ聞きたい？」

「いや聞きたくない」

というか聞きたくなくなつた。

耳に口を寄せてきたうーちゃんに下ネタ投下3秒前フラグ発見でした。

…うーちゃん残念そうにしないで。

うーちゃんとは違い下ネタなど口にしない爽やかイケメン生徒会長な伊藤先輩をびっくりさせたくて、土曜は朝からお弁当作っちゃいました。

にやり。

あざとくてけっころ。

昨日うーちゃんのブラックカードにものを言わせて文字通り髪から靴までリニユールしてもらったワタシ。

ぜひ成果を上げて帰りたい。

と思っていました。

しかし待ち合わせ場所について20分…。

張り切って40分も前にきたので、伊藤先輩はまだ来ない。

ただ街に誰もいないわけではなく…。

むしろ暇な人はたくさんいるらしく…。

「だから、待ち合わせなんです」

このセリフ何回目だ？

うーちゃんプロデュースのこの格好はたしかに男ウケがイイらしい。ターゲットが来ていないので無駄だし怖いし迷惑なことこの上ない。

ラフなボブだか長めのショートだかなヘアスタイルに、昨日うつかり値札を見てどん引きした銀のスパンコール刺繍の白いタンクトップの上から襟が肩ちかくまで大きくひらいたボートネックの白いドルマリンTシャツを重ねて、カーキのショートパンツとショートブーツの間にナマ足を盛大に披露したこのスタイル。

ばさばさまつげもベージユピnkのグロスも伊藤先輩を引っかけるためのものだったのに。

さつきから引つからなくて良い人がたくさん引つかかっています…。軽いナンパからちよっと身の危険を感じるお誘いまで、すでに5件になりました。

自分の顔から笑顔が消えていくのを感じます。

伊藤先輩がきたらとびきりの笑顔で挨拶しようって決めてたのに、もう泣きそうです。

伊藤先輩、早く来てクダサイ…。

「梶川」

伊藤先輩の声に、ホッとしながら振りむきました。

さっきからしつこく声をかけていた男の人が驚きのさりげなさで去っていきます。

いまさながら、自分が怯えていたことに気づきました。

手が、少し震えています。

「伊藤先輩…」

伊藤先輩は無言で私の手を引いて歩きだした。

…あれ？

伊藤先輩、なんか怒ってます？

…「うん、できれば優しくなぐさめて欲しいところですよ？」

44. なんか今日いけそうな気がするー

伊藤先輩は前を向いて、左にお弁当入りバックを、右に私の左手を掴まえて、ずんずんずんずん歩いて行きます。

足の長さに差があるのにけっこうなスピードで歩くから、慣れないヒールつきショートブーツの私はそろそろコケそうですよ？

「…っ！」

「うわっ」

とりあえず伊藤先輩の腕に抱き着くようにぶら下がって難を逃れました。

…伊藤先輩遅しいデスネー。

ぶらーんとぶら下がりつつ伊藤先輩を見上げると、少し気まずそうに赤くなりつつ私が態勢を整えるのを手伝ってくれた。

「…アリガトウゴザイマス」

「いや、べつに…」

こっちこそゴメン、と赤くなったまま目をふせて伊藤先輩は言った。

「…」

「…」

「…」

「…」

「…今日、ずいぶん雰囲気違っから、びっくりした」

びっくりすると怒るの？と危づくシッコミかけた。

やばいやばい。

口は災いの元よねー。

ケンカ売ったらダメよねー。

「こつこつこの嫌いデスカ？」

「いや、そうじゃなくて…」

ちらっと私を見るとまた赤くなっしてしどろもどろな伊藤先輩。

… ちょっとなんかいけそうな気がする。

「じゃあ好きデスカ？」

「…」

「好きデスカ？」

うっかり私のこと好きって言わないかなー？

「…このバツクなに入ってるんだ？」

スルーした！

がびちよびん！

でも今日の私はいつもと違います。

「お弁当作ってきました。下心みえみえ大作戦」
どうだまいったか。

伊藤先輩は一瞬言葉につまったものの、咳ばらいひとつで普段通りの落ち着きを取り戻した。

「とりあえず場所を移さないか？」

まわりをみると、あーらびっくり、けっこつ見られちゃってますねー。

…でもこのままうやむやにされたくないなあ。

正直、これでダメならもうダメかも、っていつくらい頑張ったんですよ？

… 半分以上うーちゃんまかせだけど。

ダメだったみたいだねー。
うーちゃんゴメン。

「もう帰ります…」

心が折れました。

ひとりで部屋にこもって泣いていいですか？

「なんでそうなるんだ？」

…あれ？

伊藤先輩が不思議な顔してる。

「おいで」

今度は優しく手を繋いで歩いてくれた。

あれ？

なんか胸が痛いかもしれない。

横顔を見つめてたら、こちらを見た伊藤先輩にやたら優しくハンサムに笑われた。

…。

ずきゅんと撃ち抜かれた音がした。

気のせいではなく聞こえた。

好きすぎて息が苦しい。

死ぬかもしれない。

いや、その前に泣く、と思ってたらタイミング良く伊藤先輩が手をギョっとしてくれた。

伊藤先輩えすぱーデスカ？

これ期待しちゃってイイですか？

45. 機能停止

…ふわふわします。

伊藤先輩が笑うとふわふわするんです。

ダメですよ。

そんなにハンサムに笑わないでください。
いろんなネジがはずれてしまいます。

それでも私は理想的なリア充高校生を目指しているのです。
しかしこのままでは、理想も理性もどこかに行ってしまう。

あっちこっちに良い顔をして、みんなまるっと幸せに、を目指しているのに。

うっかり伊藤先輩以外どうでもイイとか思っちゃいますよ？

「どうでもイイは大袈裟だ」

そうですね。

ちよつと話を盛りました。

嘘です。

どうでもイイことありません。

「…ってあれ？」

「梶川、ところどころ口から出てる」

「なんでもっと早くツッコまないんデスカ…！」

おかげでせつかくの乙女ワールドがちょっととした黒歴史になってし

まったくじゃないですか。
なんて痛々しい…。

「梶川は普段めったに本音を言わないからこの機会に聞いておこう
かと思つて」
！

伊藤先輩がにやりと悪い顔で笑つた…！
怒つてさえなければ基本爽やか好青年な伊藤先輩の黒い笑顔。
初めて見ました。

か、格好良かった…。

正直、いままでビジュアル的にはやや内角ストレートだと思つてい
たのに…。

どストライク。

見事などストライクでございます。

おや？

いま気がついたけど、私のまわりは黒い笑顔の似合う人がやたら多
いよね？

黒い友達、黒い親戚、黒い恋人、…なんちゃって
しかなんでだ？

私の好きなタイプが暗黒邪悪な人種つてことか？
それつて私が変々げふんげふん！
てか黒い恋人つてナニソレ沖縄土産？

「…梶川、いま何考えてる？」

「気持ちを切り替えるために可能な限りバカバカしいことを考えるようにしています」

「お前ってホントに本音を出さないんだな」
腹立つ、と呆れたように言われた。

「本音はあまり考えないようにしているんです」
そのほうが頑張れるから。

「好きだよ」

無理ばつかするの、本音を隠すの、八方美人に振る舞うの、全部腹立つけど、梶川が好きだよ。

…。

…。

…。

…。

…。

機能停止。

ぷしゅー。

46。つたぎリンゴ

今日はとても良いお天気です。

私は、元お城今公園という古城公園丸の内広場の芝生の端っこにひいたレジャーシートに座り、広場の真ん中あたりで猛烈な草バドミントンに興じる4人の親子連れを眺めています。

おそらくあの家族は頭髮の寂しいお父さんからハツラツとした小学生の娘さんまでみなさんバドミントン経験者なのでしょう。

のどかな公園の芝生広場とは思えない、うつ、とか、はっ、とかの掛け声とともに、どう考えても相手の眼球狙いとしか思えない鋭いシャトルの応酬が続いています。

たしかこの公園内にはバドミントンのできる体育館もあるはずなのですが、なぜにあの親子はアウトドアバドミントンなんでしょうね？あ、娘さんがスマッシュを打ちながら、死ねハゲ、と直球な悪態をつきました。

たいするお父さんは、38点、と軽く打ち返します。

それは今の悪態についての点数？それともスマッシュ？それとも娘さんの学校のテストの成績？

なににせよ娘さんの胸をえぐる点数であることは間違いないようです。

エスカレートするふたりの応酬に、中学生らしいお兄ちゃんは呆れ返った冷たい視線で戦線離脱なさいました。

最終的に、仕方ないなあ、といった様子のお母さんがふたりにわって入り、キャバクラのナナミちゃん、と優しく打ち返したシャトルがお父さんの胸にポコンと当たって勝負は終わりました。

お父さんは1000のダメージを受けた。

お父さんは死んでしまった。

ちゃーらー。

…はー。

目の離せない展開でした。

「まさかと思うけど、うやむやになかったことにするつもりじゃないだろうな」

伊藤先輩が静かに怒りゲージにダークネスパワーをためていらっしやいます。

とんでもないクリティカルヒットを受ける前にどうにかしたいと思えます。

でも…。

「こんな野外で告白なんて恥ずかしくて…」

なんだか顔が熱くていたたまれなくて精神的に直視できないんです…。

やたら胸が痛くて苦しくて、どうしたらいいかわからないんです。

「どうしたらイイデスカ？」

ちら、と伊藤先輩を見たら先輩は赤くなって目をそらしてしまった。

「とりあえず、弁当食べないか？」

そうですね。

とても建設的な意見です。

なぜかちょっとがっかりしつつもホッと思いました。

うん。

食べよう。

「おにぎりおいしいデスカ？」
「おいしいよ」

「卵焼きおいしいデスカ？」
「…おいしいよ」

「ポテトサラダおいしいデスカ？」
「…おいしいよ」

「ササミチーズカツおいしいデスカ？」
「…ああ」

「リンゴおいしいデスカ？」
「梶川は食べないのか？」
「胸がいつぱいで食べれません」
「…」

伊藤先輩は無言で私の口に食べかけのリンゴを押し込んだ。

…。

クリティカルに心臓が破裂したらどうしてくれるんデスカ。

47。意思の疎通が難しい

伊藤先輩は食べかけのリンゴを私の口に押し込んだ後、今度は残ってたお弁当を私に食べさせ始めた。

それはそれは清々しいくらい事務的に、問答無用で食べさせた。

まるで動物園の飼育員が担当動物に決められた分量の昼食を摂取させるためのデイリールーティーンのようにでした。

…にもかかわらず悶え死にしそうな私ってナニ?!

それって変々げふんげふん!

「おいで」

いつの間にか空になったお弁当箱とレジヤースートを片付けて右手を差し出す伊藤先輩。

私とその「おいで」っていう声の響きに心臓を掴まれたみたいに胸を痛くすること、気づいているんだろうか?

おやつを食べさせてくれるときに口に触れる指にも、見透かすみたいに目を細めたときの視線にも、顔を赤くしたときに手で口を覆うくせにも、いちいち数えきれなくらいに伊藤先輩のひとつひとつで胸が痛くなること気づいているんだろうか?

伊藤先輩を夢中にさせたくて、私のこと好きになってほしくて、でもどうしたら良いか分からなくて力技で押し切ろうとしてたけど実はアワアワなこと気づいているんだろうか?

「好きだ」って言われてどうしようどうしようってアワアワなこと、気づいているんだろうか?

「伊藤先輩」

「なに?」

「なんでもありません」

「…なに？」

伊藤先輩怖いデス。

「…あの、ふたりきりに、なりたいデス」

…？

伊藤先輩はどうしてフリーズしてしまったんでしょうか？

「…あの、伊藤先輩？」

「あ？え？」

「よかつたらうちにいらっしやいませんか？今日はうち誰もいないので」

お母さんは明日まで帰ってこないし、うーちゃんも夜までお出かけするって言ってたし。

「え？え？」

「前に伊藤先輩のお家にもお邪魔させていただきましたし」

ふたりきりなら、私も素直に「好きです」って言えると思うんだよね。

さんざんミエミエの態度を取っておいてなんだけど、人前で告白とか絶対ムリだし。

「…梶川、なに言ってるか分かってる？」

？

「はい」

分からないのはなんで伊藤先輩がそんなこと言っつのかです。

「あ。あの、伊藤先輩が予定してくれてた事とかあつたらその後でイイんですよ？」

…いま伊藤先輩が苛立たし気に目を細めた理由も分かりません。

「イイよ。行こう」

なんでため息つくんだろう？

結局、家に着くまでずっと微妙に不機嫌なままだった。

…ちょっと告白前に心が折れました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8198y/>

思春期スイッチ。

2012年1月11日07時46分発行